日本メノナイトキリスト教会 信仰告白 一本文と解説―

日本メノナイトキリスト教会協議会

目 次

1	序文(喜来業康執行委員長)	3, 4
2	日本メノナイトキリスト教会 信仰告白	·····5~8
3	上記解説	·····9~20
<	〈参考資料〉	
4	MWC 共有の確信	······21~23
5	米国メノナイト教会の信仰告白	······24~91

私たち北海道のメノナイト教会の「信仰告白」をつくろうという提案が 2002 年の協議会総会にだされてから 11 年の歳月をかけて検討し、学び、協議してようやく 2013 年 5 月 18 日第 61 回協議会総会において採択されました。

北海道のメノナイトは、60余年の歴史の中で各教会の情勢は大きく変化してきています。遡ってみますと、1958年「日本メノナイト協議会」として発足、1980年に法人化し「日本メノナイトキリスト教会協議会」となり今日に及びました。その発祥は米国ミッションボードから派遣された宣教師の方々によって種が蒔かれ、全道各地に誕生していったという共通の原点を持っています。協議会は、現在17の教会がそれぞれ独立した教会として加入し、構成されています。17の教会は、60~20年という歴史、農村と都市という地域、指導者の神学的背景などなど、それぞれの特徴や違いを持っています。現在の協議会が成り立っているのは、そのような違いがあってもお互いを尊重し受け入れ、アナバプテスト・メノナイトという共通のルーツを大切にしながら、共に歩んでいるからだと考えます。

採択されたこの「信仰告白」は、源流であるアナバプテストの人たちが作成した「シュラトハイム信仰告白」が当時の彼らを取り巻く状況の中でつくられた特別なものであったように、私たちとっても重要なものと思います。現在協議会加盟のそれぞれの教会は、地域により教会員の高齢化や教会員の減少の課題、後継指導者・牧師の課題等々に直面しています。また、社会においては、私たち全ての人の「いのち」に関わる原子力発電所事故や平和憲法改正という課題、収まることのないように見える世界各地での紛争、地球規模の環境破壊等々が突きつけられています。

このような状況の中、私たちは小さな群れではありますがアナバプテスト・メノナイトの共同体として、真の平和教会としてシャロームを求め、社会に働きかけ、教会の使命である福音宣教を行っていきたいと願います。

今ひとつ、この「信仰告白」が、御題目やドグマとしてではなく、私たちの日常生活の中で実践され積み重ねられて生きたものとなることを祈ります。

おわりに、11年間この信仰告白の作成に携わられた信仰告白検討委員会の委員 の皆さん、教育研究センター主事の皆さん、そして貴重なご意見を頂いた方々に 心から感謝を申し上げます。

2013年7月

日本メノナイトキリスト教会協議会 執行委員長 喜来 業康

日本メノナイトキリスト教会協議会信仰告白

日本メノナイトキリスト教会協議会第 61 回総会にて採択 2013年5月18日

日本メノナイトキリスト教会協議会は 16 世紀宗教改革に始まったアナバプテスト・メノナイトの信仰的遺産を受け継ぎ、加盟するそれぞれの教会が福音宣教のために連帯、協力する神の民、主にある共同体である。加盟する教会はそれぞれ自主、自立、自給した教会であるが、私たちはイエス・キリストの弟子として今日共有する信仰を再確認し、互いの交わりと協力がさらに深められることを願い、ここに日本メノナイトキリスト教会協議会信仰告白を定める。

私たちの信仰告白の中心は主イエス・キリストである。主は神の国の福音を宣べ伝え、十字架の道を歩まれ、その教えと生涯そして死を通して私たちを罪から贖い、弟子として私たちを召される。復活した主は死に打ち勝ち、今も私たちに先立って働いている。私たちは旧・新約聖書に証しされたこのイエス・キリストを唯一の救い主、信仰と生活の唯一の規範として服従し、イエス・キリストの父なる神を礼拝する。

私たちは世界にあるメノナイト教会のひとつの枝である。このことを覚え、メノナイトの兄弟姉妹たちと共に『共有の確信』(2006年3月、メノナイト世界会議総会において採択)を告白する。これは現代にあって弟子の道を歩むアナバプテスト・メノナイトの一致した信仰を表している。

私たちはまた全世界に分かたれた神の民、諸教会のひとつの枝である。このことを覚え、すべての兄弟姉妹たちと共に使徒信条を始めとする「世界教会信条」を告白する。

主イエス・キリストはすべてのものを新たにするためにやがて来られる。私たちには朽ちない希望が与えられている。この日を待ちつつ、私たちは主の福音に生き、働き、誠実に歩む。主よ、私たちを守り、導き給え。

私たちは信じます、

- 一、イエス・キリストは、父なる神の言(ことば)であり、聖霊によって示される。
- 二、教会は、信じる者の共同体であり、聖霊の導きのもとに聖書から学ぶ。
- 三、信じる者は、主イエス・キリストに聴き従い、仕え合い、隣人を愛する。
- 四、信じる者は、被造物を大切にし、イエスによる平和と正義を造り出し、神の国の働きに与かる。

五、信じる者は、イエスの非暴力の生き方に倣い、私たちは戦争に参加しない。

注

「世界教会信条」は使徒信条、ニカイア・コンスタンティノポリス信条、カルケドン信条、アタナシオス信条など古代教会で成立した信条です。カトリック、正教、プロテスタントの全教会が受け入れています。

Japan Mennonite Christian Church Conference Confession of Faith

Adopted by the 61st General Conference of the Japan Mennonite Christian Church
Conference
18 May 2013

The Japan Mennonite Christian Church Conference is a people of God, a community of the Lord, in the Anabaptist-Mennonite faith tradition that began in the 16th century Reformation. Congregations in the conference cooperatively share in the work of evangelization. Each congregation is autonomous, independent and self-supporting, but as disciples of Jesus Christ we hereby establish the Japan Mennonite Christian Church Conference Confession of Faith to reaffirm our shared faith today with the hope of further deepening our mutual fellowship and cooperation.

The Lord Jesus Christ is at the center of our confession of faith. The Lord preached the good news of the Kingdom of God, walked the way of the cross, and through his teaching, his life, and his death, he redeemed us from sin and calls us to be disciples. The risen Lord defeated death and is at work ahead of us even today. We follow this Jesus Christ, to which the Old and New Testament give testimony, as our sole savior and sole role model for our faith and life, and we worship God the Father of Jesus Christ.

We are a branch of the worldwide body of Mennonite churches. With this in mind, we join our Mennonite brothers and sisters in confessing the "Shared Convictions" statement (adopted by the Mennonite World Conference General Council in March 2006). This expresses the faith that unites Anabaptist/Mennonites who walk in the path of disciples in today's world.

We are also a branch of the people of God separated into various churches around the world. Remembering this, we join all brothers and sisters in confessing the creeds of the worldwide church, starting with the Apostles' Creed.

The Lord Jesus Christ will one day come to make all things new. We have been

granted imperishable hope. As we wait for that day, we live, work, and strive to faithfully walk in the path of the Lord's gospel. Protect us, O Lord, and guide us.

This we believe:

- 1. Jesus Christ is the Word of God the Father, and is revealed by the Holy Spirit.
- 2. The church is a community of believers which learns from the Bible under the guidance of the Holy Spirit.
- 3. Believers listen to the Lord Jesus Christ, serve each other, and love their neighbors.
- 4. Believers care for creation, build peace and justice which come from Christ, and participate in the work of the Kingdom of God.
- 5. Following Jesus' nonviolent way of life, we as believers do not participate in war.

Note:

"Creeds of the worldwide church" refer to creeds established by the ancient church, including the Apostles' Creed, Nicene-Constantinopolitan Creed, Chalcedonian Creed, and Athanasian Creed. Catholic, Orthodox and Protestant churches all accept these creeds.

(翻訳:ケン・ジョンソン・シェンク)

日本メノナイトキリスト教会協議会信仰告白解説

メノナイト教育研究センター主事会

本解説は協議会執行委員会の委託を受け 2011 年 5 月の協議会 59 回総会後に「みち」164 号から 6 回にわたり連載されたものです。それぞれの項目の解説は主事会が分担し各主事が当たっています。その経緯を以下に記しました。

資料として掲載されているメノナイト世界会議の「共有の確信」、米国メノナイト教会の信仰告白と共に今後それぞれの教会での学びに役立てて頂き、弟子の道を歩む私たちの盲教と教会形成に資するものとなれば幸いです。

責任主事 小林良裕(札幌ベテルキリスト教会)

協議会信仰告白検討委員会(森博委員長)は5項目からなる「日本メノナイトキリスト教会協議会信仰告白案」を作成し、2011年5月、協議会総会に提出しました。同総会では討議の結果、信仰告白案に関して採決を保留し、あらためて全体の学びの機会を持つ必要が確認されました。総会後に検討委員会は任期を終了し、その扱いは執行委員会よりメノナイト教育研究センター主事会に委託されました。

主事会では各教会の学びのために「みち」誌上に信仰告白案の解説を連載すると共に、この信仰告白作成に至る経緯、意義、私たちの信仰的立場を簡潔に表明する文章を加えました。今回この前文を加えた5項目を「信仰告白案」として執行委員会にお返しすることになります。この告白の要点について考えてみたいと思います。

- ① 先ずアナバプティズム・メノナイトの信仰の中心である「キリストに従うこと」、弟子の道という基本線が明確にされていることです。私たちの信仰は日々主に聴き従い、神の国と神の義を求めること、神と隣人を愛することです(マタイ 6・33、22・34 以下)。
- ② この基本線は教会においてキリストの霊である聖霊の下に聖書を繰り返し学び、その御声に耳を傾けることによって守られます。これは教職など特定の者だけの務めではありません。一人ひとりが行う務めです。
- ③ 教理的、神学的な言葉を排して、弟子の道を生きる私たちへの具体的な指針が述べられています。教理はしばしばメノナイト教会の歴史において分裂を

もたらしました。私たちの一致は教理の上にではなく、キリストという土台の上に建てられます。

④ 非暴力の道が明確に示されています。これは他の教派、教会の信仰告白には 見られない大切な文言と言えるでしょう。

はじめに

最古の信仰告白 - イエスは主である -

信仰告白とは何でしょうか。新約学者オスカー・クルマンは『原始教会の信仰告白』の中で教会の最古の信仰告白として新約聖書における「イエスはキリストである(イエスース クリストス)」(マルコ 8:29、マタイ 16:16、ヨハネ 6:68)や「イエスは主である(キュリオス イエスース)」(ローマ 10:29、I コリント 12:3)をあげています。このイエスは主であるというキリスト信仰、キリスト告白によって教会はユダヤ教から分かたれ、まったく新しい歩みを始めたのでした。この歩みは決して順風満帆なものではなく、多くの苦難に満ちたものでした。しかし教会はこのわずかに2文字のキリスト信仰に支えられ前進していったのです。「主イエス・キリスト」という御名自体がイエスは主であり、キリストであるという信仰告白を表しています。皆さんは「魚」がキリスト教のシンボルになっていることをご存じだと思います。魚を表すギリシャ語はイクススですが、これは「イエス・キリスト、神の御子、救い主」という言葉のギリシャ語の頭文字になります。この「魚」というシンボル自体もひとつの信仰告白だと言えましょう。

信条と信仰告白

現在プロテスタント、カトリック、正教会の諸教会が共通して受け入れるのは「世界教会(あるいは公司)信条」と呼ばれる使徒信条、ニカイア・コンスタンティノポリス信条、カルケドン信条など 5 つの信条です。一部は讃美歌 21 にも収められています。私たちメノナイトも使徒信条を礼拝で用いる教会は多いと思います。これらの信条を見るとキリスト論や三位一体論が中心的な主題になっていることが分かります。これはキリストの人性を否定するグノーシス主義や神性を否定するアリウス派と鋭く対立した古代教会の状況を反映しています。この世界信条を「信条」(ラテン語で symbolum、英語は creed)といい、16 世紀宗教改革の時代に多く著された主にプロテスタント教会の信仰文書を「信仰告白」(ラテン語で confessio、英語は confession)といいます。中世にはこうした文書はほとん

ど著されませんでした。さて宗教改革においてプロテスタントはカトリックに対抗しつつ自らの信仰を明らかにする必要に迫られました。その信仰とは「信仰のみ」、「恵みのみ」、「聖書のみ」という福音主義信仰でしたが、一方で聖餐の問題ではルター派と改革派、洗礼の問題ではルター派、改革派と再洗礼派が激しく対立しました。こうした事情から各派の信仰告白は自らの理解する教義や教理を網羅的に扱う長文で煩雑なものになりました。ルター派の「アウグスブルク信仰告白」(1530年)や改革派の「第1スイス信仰告白」(1536年)はその代表例です。これに対して7項目からなる再洗礼派の「シュライトハイム信仰告白」(1527年)は実に簡潔です。教義や教理の展開はそこにはありません。彼らの関心はむしろこの世におけるキリストの弟子としての生き方、あり方に深く向けられていたと言えます。

信仰告白の持つ「危うさ」 - 信仰告白と聖書の関係において -

信仰告白案に対して教理的な言及が少ないという意見がありました。罪や十字 架における救済(贖罪)にも触れるべきだという考えもあります。理解できますが しかし率直に申し上げるとこれにはある危険を伴わないでしょうか。すなわちひ とつの教理的立場が取り上げられ、他の立場や理解が顧みられないという危険で す。一例ですが罪に関して「原罪」という教理があります。伝統的にカトリック やプロテスタントの多くはこれを受け入れますが、ギリシャ正教など正教会では 「原罪」自体が否定されています。人間の罪を厳しく考えた再洗礼派もこの教理 には批判的でした。聖書的根拠が弱いからです。贖罪についても聖書の証言は多 様です。決して代理的贖罪説が唯一の証言ではありません。しかし信仰告白に特 定の教義や教理が採用されると聖書はこの立場でしか読めなくなります。聖書が 信仰告白によって拘束されてしまうのです。これでは本末転倒です。信仰告白は 確かに信仰の共通認識、規範ではありますが、聖書はその基となるもの、いわば 規範の中の規範です。正確には聖書に示されている神の御言葉であるイエス・キ リストの教えと生き方が唯一の規範と言えるでしょう。伝統的な神学の言い回し では信仰告白は norma normata(規範を与えられる規範)ですが、聖書は norma normans(規範を与える規範)です。聖書の内容の豊かさはひとつの信仰告白には 収まらないのです。その意味では私たちはいわば禁欲的に「シュライトハイム信 仰告白」の線に立つことが必要ではないでしょうか。

第一項

「イエス・キリストは、父なる神の言(ことば)であり、聖霊によって示される」

イエスとの出会いから始まる

「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」。最初に召した弟子シモン・ペテロにイエスは問いかけます。「あなたこそキリストです」(マルコ 8:29 〈口語訳〉)。未知のまま信じてついて行き仲間達と共にイエスの宣教に加わった者の、最初の信仰告白でした。

聖霊が臨んで信じる者の群れが当時の帝国社会に生き始めた時、彼らのアイデンティティは、伝統的な民族の宗教 (ユダヤ教) にも護持的神々の国家宗教にも属さず、単純にイクスウス〈魚〉(「イエス・キリスト、神の御子、救い主」の意)のシンボルが互いを確かめ合う合言葉となり、信仰告白となりました。

多くの異なった教えや国教化されたキリスト教が興る中で、神学的係争を経て、 細密な教理的信条や信仰告白が今日まで発展してきた一方、それとは別に、人は、 信者や各種の宣教メディアを通じて聖書の示すイエスと出会い、その時その人と しての素朴な信仰を告白してきました。イエスと出会うところから人格的な信仰 の告白が生まれます。

イエスは神の言(思いと行動)を現す。

「神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった」(創 1:3 〈以下新共同訳〉)。 混沌とした闇の深淵に神の霊が動き、神の言が天地、自然界、人間を造られた、 と聖書は始まります。言には創造への意志とそれを実現する力が含まれています。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った」(ヨハネ1:1~3)。万民を対象に書かれた第四福音書の出だしも言(ロゴス=存在の第一原因)で始まり、明らかにイエスを指しています。イエスの神性、先在性が説かれ、次の「言は肉となってわたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た」(同1:14)以下、誕生、生涯、死、復活、昇天、ペンテコステをとおし、イエスは人間として父なる神の愛の本性を啓示し、救い(再創造)の目的を果たしたことを示しています。

イエスは聖書(書かれた神の言)の最終解釈者

分裂を招きかねない神学論争が起きるのは人間が自分の主張を聖書に読み込も うとする弱さからきます。御言葉を正しく聞くためにはその主人公であり著者で もあるイエスご自身に聞かなければなりません。聖書の上にイエスの権威があります。新約のイエスは旧約の律法をどれほど深く、高く、解釈し教え実践しているでしょうか。イエスは神ご自身の思いをあらわし、救い(平和)の行動を先導するのです。「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが聖書は私について証しをするものだ。」(ヨハネ 5:39)。「あなたがたがわたしを知っているならわたしの父をも知ることになる」(ヨハネ 14:17)。

イエスの啓示は聖霊によって悟らされる。

ペテロが自らの弱さにも気づかず「あなたはメシヤ、生ける神の子です」(マタイ 16:16) と答えた時、イエスはそのまま彼を「幸いだ」と祝福し、「あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ」と言われ、「この岩の上にわたしの教会を建てる」と約束されました。

自分の経験や知性、決心によってではない。神の霊がその人に臨んだとき、信仰は告白される、そう気付かされます。イエスはご自分の臨在として聖霊を約束されました。この方によって信仰と教会への参与が与えられ、イエスの命を共に生きる人生へと導かれます。

第二項

「教会は、信じる者の共同体であり、聖霊の導きのもとに聖書から学ぶ」

教会 - 主イエスを信じる兄弟姉妹の共同体 -

イエス・キリストは、「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所にはわたしもその中にいるのである」(マタイ 18:20)と約束されました。教会は建物でも、リタージーや典礼が執り行われる場所でもありません。教会は神によって呼び集められた、イエス・キリストを信じる者たちの共同体です。教会を指すギリシャ語のエクレシアは「呼び集める」(エクレオー)という動詞の名詞形です。古代ギリシャでは市民たちの集会を指しました。教会とはキリスト信徒の集まり、交わりに他なりません。その中心にキリストが立っておられるのです。使徒行伝 2:46~47 にはエルサレムの信徒たちが自発的に家の集会で交わりや食事、またさんびを日々共にしていたことが記されています。

教会の復元を目指したアナバプテスト運動

キリスト教の最初の300年間、教会はこのような「信じる者の共同体」でした。しかし4世紀にローマ帝国の国教となってから状況は一変します。すべての住民に洗礼が強制され、信仰が強要されました。この結果深刻な不信仰が教会に蔓延します。多くの人たちにとって信仰は見せかけであり、せいぜい死後に地獄行きを避けるための便法に過ぎませんでした。聖職者たちの腐敗も進行しました。歴史家は15世紀のローマ教皇のひとりヨハネス23世がナポリ周辺の海賊であり、彼がメディチ家の資金的な後押しで教皇位についたとさえ指摘しています。

16 世紀の宗教改革においてプロテスタント諸教会は国家教会であり続けました。洗礼の強制と信仰の強要が継続されたのです。これに異議を申し立てたのがアナバプテスト、再洗礼派でした。彼らは最初の300年間に存在した「信じる者の共同体」、すなわち真の回心とキリストに従う生活を決断した者たちによる教会を回復しようとしたのです。その意味で彼らは宗教改革を目指したと言うよりは教会の回復、復元を目指したと言った方が良いかも知れません。

つなぐこと、解くこと - 教会における兄弟姉妹のあり方 -

このようにアナバプテストの主要な関心は実は信仰に基づく洗礼でも平和主義でもありませんでした。弟子としてキリストに従う者たちの自発的な教会の形成だったのです。そして信仰に基づく洗礼とキリストの生涯に根差す非暴力の生き方はこの弟子の道を生きる教会にとって不可欠の要素でした。

1524年に書かれたコンラート・グレーベルらによる「トマス・ミュンツアーへの書簡」の中には真の教会における兄弟姉妹のあり方を規定する原則としてマタイ 18:15~18にあるキリストの勧めが3回も引用されています。彼らスイス兄弟団はこの箇所を「キリストの規範」と呼びました。教会の交わりにおける兄弟姉妹の過ちや不正はただちにこのキリストの勧めによって対処されなければなりません。これを放置し、目をつぶることは実際には愛の行いでも、赦しでもありません。それはキリストと兄弟姉妹に対して無責任なあり方であり、むしろ交わりを破壊する危険さえはらむと考えられました。またこうした交わりにおける相互の訓練は決して裁きや管理ではありません。過ちを指摘する側にも真摯な自己吟味が必要です。何よりもその目的は兄弟姉妹を再びキリストのために得ることでした。

キリストの霊のもとで共に聖書を学ぶ

旧新約聖書はイエス・キリストを証しするものであり(ヨハネ 5:39)、キリス

トこそが「神の栄光の輝き、神の本質の真の姿」(ヘブル 1:1~3)です。信条や信仰告白が時代的、歴史的な限界を持つように、恐れずに言えば書かれた言葉である聖書もそれだけでは人間的な限界を持っています。このことを主イエスは「~と言われていたことは、あなたがたの聞いていることである。しかし、わたしはあなたがたに言う」として教えられました(マタイ 5:21~48)。聖書はキリストを中心に解釈され、読まれなければなりません。活けるキリストは聖書に対しても主なのです。互いに矛盾する聖句はイエスの生き方と教えを規範にして理解されなければなりません。そして聖書の学びは一部の教職だけの務めではありません。キリストの霊のもとで教会の信徒全員がなすべき務めなのです(Iコリント14:29)。共に聖書を学ぶこと、家庭集会や聖書研究会の意義を見直し、大いに進めていきましょう。

第三項

「信じる者は、主イエス・キリストに聴き従い、仕え合い、隣人を愛する」

信じる者は、キリストの体なる教会の一員としてキリストに従う

キリスト者の信仰が、主イエスによって成し遂げられた神の救いの恵みを個人 的に受け入れ、信じる面があったとしても、単独でキリストにあって歩む信仰を 聖書は教えていない。

キリスト者は、信じる者の群れ、信仰共同体の一員として共にキリストにあって交わりの中に生きる者とされている。

パウロは、そのキリストにあって生きる信仰共同体を「キリストのからだ」として捉え、信仰者とキリストとの関係、信仰者同士の互いの関係とそのあり方を教えている。

この「キリストのからだ」という比喩は、キリストがそのからだのかしらと教えているように、キリストがその共同体の核心であることと、共同体の存在もいのちもキリストに依存し、キリストを離れて存在し得ないことを意味している。それと同時に、「キリストのからだ」としての共同体は、体がそうであるように、多様性を持ち、個々の性質、立場、その置かれた事情に様々な違いがあったとしても、共通の信仰、働き、歩み、生き方を共有し、互いにいたわり合い、助け合い、仕え合って共に生きる共同体であることを意味している。信じる者は、そのような共同体の一員として生き、歩みつつこの世に、キリストの救いの恵みを証

し、宣べ伝えるために召されていると信じる。

信じる者は、イエスの生き方とみ業を受け継いで神の国を証しする

主イエスは信じる者を弟子として招き、ご自身のみ国を証し、宣べ伝えるために訓練し、お遣わしになった。マタイ 10 章やルカ 10 章の記事によると、弟子たちは、イエスの代理人として伝道に遣わされ、イエスがなさったと同じように、み国が近づいたと宣べ伝え、病める者を癒し、らい病人を救い、悪霊を追い出す働きを行っている。

このことは、キリストを信じる者すべてが、キリストの弟子になり、キリストのみ業を受け継ぎ、隣人を愛して生きたキリストに倣って、神の国を宣べ伝える働きのために召されていることを示している。

使徒の働きの記事は、ペンテコステ直後に誕生したキリスト者の群れが、聖霊 の導きと主イエスの生き方に倣って、新しくされ、これまで教えられてきた生き 方、歩みに踏み出した様子を伝えている。

彼らは、他の人たちと違って、その持ち物を共有し、迫害する者のためにさえ 祈り、心と思いを一つにし、喜びと真心を持ってキリストを証しする魅力ある歩 みをした。そのためでしょう、すべての人々に好意を持たれ、毎日信じる仲間が 加えられたと記されている。勿論、このような初代教会にも、もう一方では様々 な問題、トラブルが起こっていたことを著者は伝えている。が、そうした弱さ、 欠けがあったとしても、この弟子達は聖霊に導かれて強められ、新しくされつつ、 キリストを宣べ伝えた信仰者たちであったことが伝えられている。私たちも、時 代が違っても、置かれた状況が違っていても、この初代教会の弟子達に倣う者で ありたい。

第四項

「信じる者は、被造物を大切にし、イエスによる平和と正義を作り出し、神の国の働きに与る」

第四項は、キリスト者がこの地上においてどのように生きるかを具体的に記しています。信仰告白文としては、引き続く第五項同様に、まれな告白ですが、主イエスの弟子として召されているキリスト者は、生活の全ての領域において、喜びをもって神の御心を行うのであって、それはアナバプテスト達が殉教の中でさ

え追求した真の信仰の歩みです。

「信じる者は被造物を大切にし」

私達は、神が天地を創造された主であることを信じています。天地万物の完成は、神ご自身にかたどって造られた人間を含め、全ての被造物は「極めて良かった」状態であり、これが神がお造りになられた被造物本来の姿です(創世 1:31、2:1)。このことを聖書がいう平和(シャローム)の姿、神の祝福、健やかさと言って良いでしょう。しかし、このシャロームの状態が壊される人間の罪の現実があります。それは戦争だけではなく、神が造られた自然を破壊し、長期間にかけ、人間の身体および生命にまで影響を及ぼす原子力発電所の事故まで含まれます。神は、ご自身の似姿に造られた私達人間を、この自然の世界に対して、忠実な管理者として招き、大切に管理する責任を委ねられました(I コリ 4:1~2)。それは自然が持つ力と美しさを保ちつつ、神の祝福と健やかさの中に生きる私達が、全ての被造物と共に福音を分かち合うために、神が私達人間を信頼し、喜んで任せておられるということです(詩編8編)。

「イエスによる平和と正義を作り出し、」

平和とは神の平和であり、究極的にシャロームを創造・修復・回復される神は、 そのために神自ら「戦士(勇士)」として、「正義をもって裁き、また戦われる」 御方であり、私達キリスト者は、この平和の主であられるキリストを信じていま す (出エ 14:14、イザ $42:1\sim7$ 、13、イザ $9\sim11$ 章、黙示 $19:11\sim16$)。ですか ら私達は、聖書にある通り、「実に、キリストはわたしたちの平和であります」と 告白するのです(エペ2:14)。この主イエスの地上での生涯は、報復することな く、あきらめず正義のために耐え忍び、迫害する者のために祈り、赦すことにお いて、余すところなく私達に愛の模範を示されました。それは私達が単に十字架 を眺めるのではなく、むしろ主イエスが実践した非暴力による平和と正義を、積 極的に求めて生きる生き方です。「作り出し」と言う表現は、主イエスが義に苦し む人々への祝福を約束されたことを信じつつ、私達が聖霊の助けを求めて祈り、 社会生活において「平和を実現する者」また「和解のために奉仕する任務」に与 ることを意味します(マタイ5:6、9~12、Ⅱコリ5:18)。その時、私達キリスト 者自身もまた危険というリスクや犠牲を負い、平和を作る働きを担う覚悟が問わ れます(第五項の解説を参照)。しかし、ここで心得るべきことは、キリストを覚 えて平和を忘れることが福音の空洞化であるならば、同様に平和を覚えて平和の 主であるキリストを忘れることも、また同じだということです。それは平和の源 であるキリストから外れること、またキリストを歪めることであり、更にそのような平和の働きは傲慢なものと見られるでしょう。シャロームとは、あらゆる欺瞞と対極にあります。ですから私達キリスト者は、おごることなく、むしろ十字架の贖いと復活の意味において、謙遜に平和作りの務めをするのです。

「神の国の働きに与る。」

神の国とは、キリスト教化されることでも、単に「天国」のみを意味するのでもありません。主イエスの福音宣言は、この地上に御心が現実と成ることであり、神のシャロームが押し広げられることです(マルコ 1:14)。神はご自身がその使命である「神の宣教」の主導者として、シャロームの修復・回復を創造的な転換の業をもって働かれます。「神の民」である私達キリスト者は、この「神のために力を合わせて働く者」として召し出されています。地の塩・世の光としてキリスト者も教会も、神のシャローム作りの働きに参与するのです。

第五項

「信じる者は、イエスの非暴力の生き方に倣い、私たちは戦争に参加しない」

第五項は、他教派にあまり類を見ない告白文です。クリスチャンの中でも正義の戦争を唱える者はいますし、また戦争を擁護するために聖書を引用することすらもあります。しかし私たちメノナイトの群れは「歴史的平和教会」と呼ばれ、非暴力の生き方を貫いてきました。それはキリストによって救われ神の子とされた私たちは肌の色、民族、言語、国籍などが異なっていても兄弟姉妹であり、神の家族であると信じるからです。そしてその兄弟姉妹同士が殺し合うことなど考えられないからです。また「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」(マタイ 5:44)と言われたイエス・キリストに従うからです。

米国においては、メノナイトなど歴史的平和教会の働きかけなどによって良心 的兵役拒否などが権利として認められるようになりました。

私たちは、聖書全体を「平和」(シャローム)という視点から捉え、イエス・キリストの生涯とそのみ言葉に光を当てて解釈し、実践し、神の国を実現させるように努力してきました。

イエス・キリストは、その生涯において愛を実践し非暴力を貫き通しました。

「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。」(Iペテロ2:22-24)

この直前の文章は「あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。」とあります。私たちはそのイエスに従うのです。

そればかりではなくイエス・キリストは、積極的に平和と和解をもたらす様に 私たちに呼びかけて居られます。「平和をつくる者は幸いです。その人は神の子ど もと呼ばれるからです。」(マタイ 5:9)

「神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。すなわち、神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。」(IIコリ 5:18-19)

この第五項は、他の項目とは異なり、私たちの行動を規定します。

平時においてこの告白を唱えることはやさしいことです。しかし戦時において この告白を貫き通せるかが、私たちに問われていることなのです。

先の戦争では、日本の教会の多くは、国に迎合し戦争に加担していきました。 しかし一部の教会は、国策に反対したため激しい迫害に遭い、財産を没収され、 職を失い、殉教者も出しました。にもかかわらず、多くの教会は声を上げずに、 その教会を黙殺する結果となりました。私たちの群れは、戦後に宣教が開始され た教会ですが、日本のこのような歴史や状況を考えないわけにはいきません。

また国際法上軍隊とみなされる自衛隊や、軍事費相当の税の支払いの拒否など、個人としても教会としても、この項目を告白する者として「私たちは戦争に参加しない」の内容を吟味しなければならないでしょう。そのことの故に、迫害に遭い、財産を没収され、職を失い、殉教者を出すことになるとしてでもです。

米国で良心的兵役拒否の権利が認められた背景には、平時における平和の働きかけがありました。戦時になると、戦争に行きたくないために平和主義を名乗るものは現れました。しかし、第一次世界大戦後の平時に、政府などへの積極的な働きかけがあったからこそ、この権利を勝ち得たのです。

平和を実現するためには、今が問われています。その点からも、この第5項を

告白する意味は深いでしょう。

やがて、イエス・キリストは再臨し、「彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。」(イザヤ 2:4)という平和の約束は実現します。その時まで地上を生きる私たちに平和を作り出す働きが委ねられているのです。

共有の確信

神の恵みによって、私たちはイエス・キリストのうちにある和解の福音を生きること、宣教することを求めます。いつ、どこにおいてもキリストの一つのからだとして、次の条項を信仰と生活の中心として心に留めます。

- 1. 神は父、子、聖霊としてご自身を明らかにされました。また、一つの民を交わり、礼拝、奉仕、証かしにおいて信仰へと召し、罪に堕ちた人間を回復されようとする創造主として私たちに知られています。
- 2. 主イエス・キリストは神のひとり子です。その生涯と教え、十字架と復活を とおして私たちがいかにして忠実な弟子となるかを示してくださり、世を贖 われて、永遠の命を供えてくださいます。
- 3. 教会は、私たちが罪から立ち帰り、イエス・キリストを主と仰ぎ、信仰を告白して洗礼を受け、生涯キリストに従うように神の霊が召してくださった者たちの共同体です。
- 4. 信仰共同体として、私たちは聖書を信仰と生活の規範として受け入れ、聖霊 の導きによって解釈し、従順への神の御旨をイエス・キリストの光に照らし て見極めようとします。
- 5. イエスの霊は私たちが暴力を棄て、敵を愛し、正義を求め、持てる物を必要とする人々と分かち合い、平和を造り出す者となるように、生活のあらゆる場面で神に信頼する力を与えてくださいます。
- 6. 私たちは互いに責任を担いあう心をもって常に集まり、礼拝を守り、主の晩餐を祝い、神の御言葉に聴き従います。
- 7. 世界に広がる信仰共同体として、私たちは国籍、人種、階級、性、言葉の境界を超越しています。私たちは他の人々に仕えることにより神の恵みを証かしし、創造された万物を大切に守り、イエス・キリストを救い主かつ拝し仕える主として知るように全ての人を招きつつ、悪の力に妥協せずこの世に生きていく道を求めていきます。

これらの一致に至った共有の確信についてはイエス・キリストに全く従い弟子 の道への模範となった16世紀アナバプテストの先祖たちから霊の息吹を受けて いるものです。聖霊の導きによって歩み、キリストの再臨、神の国の完成を信じ て私たちは待ち望んでいます。

(2006年3月15日 カリフォルニア州パサデナメノナイト世界会議総会 (MWC) にて採択)

Mennonite World Conference A Community of Anabaptist-related Churches

Shared Convictions

By the grace of God, we seek to live and proclaim the good news of reconciliation in Jesus Christ. As part of the one body of Christ at all times and places, we hold the following to be central to our belief and practice:

- 1. God is known to us as Father, Son and Holy Spirit, the Creator who seeks to restore fallen humanity by calling a people to be faithful in fellowship, worship, service and witness.
- 2. Jesus is the Son of God. Through his life and teachings, his cross and resurrection, he showed us how to be faithful disciples, redeemed the world, and offers eternal life.
- 3. As a church, we are a community of those whom God's Spirit calls to turn from sin, acknowledge Jesus Christ as Lord, receive baptism upon confession of faith, and follow Christ in life.
- 4. As a faith community, we accept the Bible as our authority for faith and life, interpreting it together under Holy Spirit guidance, in the light of Jesus Christ to discern God's will for our obedience.
- 5. The Spirit of Jesus empowers us to trust God in all areas of life so we become peacemakers who renounce violence, love our enemies, seek justice, and share our possessions with those in need.
- 6. We gather regularly to worship, to celebrate the Lord's Supper, and to hear the Word of God in a spirit of mutual accountability.
- 7. As a world-wide community of faith and life we transcend boundaries of nationality, race, class, gender and language. We seek to live in the world without conforming to the powers of evil, witnessing to God's grace by serving others, caring for creation, and inviting all people to know Jesus Christ as Saviour and Lord. In these convictions we draw inspiration from Anabaptist forebears of the 16th century, who modeled radical discipleship to Jesus Christ. We seek to walk in his name by the power of the Holy Spirit, as we confidently await Christ's return and the final fulfillment of God's kingdom.

Adopted by Mennonite World Conference General Council Pasadena, California (USA) March 15, 2006

メノナイトの見地による信仰告白

米国ジェネラル カンファレンス メノナイト教会 (GC) 米国メノナイト教会 (MC) 1995年

目 次

第1条	神
第2条	イエス・キリスト
第3 条	耶 雪

 第3条
 聖

 第4条
 聖書

第5条 創造と神の摂理 第6条 人の創造と召命

第7条 罪 第8条 救い

第9条 イエス・キリストの教会

第10条 盲教する教会

第11条 洗礼 (バプテスマ)

第12条 主の晩餐

第13条 洗足

第14条 教会における戒規

第15条 奉仕の務めと指導者

第16条 教会の秩序と一致

第17条 弟子の道とキリスト者の生活

第18条 キリスト者の霊性

第19条 家族、独身、結婚

第20条 真実と宣誓忌避

第21条 キリスト者の管理の務め (スチュアードシップ)

第22条 平和、正義、無抵抗

第23条 政府と社会に対する教会の関係

第24条 神の統治

序文

メノナイトの信仰を表明するものは、きわめて早い段階から、私たちの間にいくつか存在しました。1527年、メノナイトの先駆者であるアナバプテストのあるグループは、シュライトハイム信仰告白を書いています。それ以後、メノナイトの諸グループは数多くの信仰表明を作成してきました。ここに表明した『メノナイトの見地による信仰告白』は、このような多くの信仰告白の歴史の中に位置するものです。初期のキリスト教会が持っていた歴史上重要な信条は、初めからメノナイトの信仰告白の土台をなすとみなされたもので、この信仰告白においても同じように基本をなしています。

このたびの信仰告白は、北米における2つのメノナイトのグループ、すなわち 米国メノナイト教会(MC)と米国ジェネラルカンファレンス・メノナイト教会(GC) による成果です。

メノナイト教会は 16 世紀にヨーロッパのスイスから南ドイツにかけての地方で誕生し、その地でシュライトハイム信仰告白が採択されました。メノナイト教会はこの信仰箇条を今でも認めています。やがて、このグループは、さらにいくつかの信仰告白を追加しました。それらが、ドルドレヒト信仰告白(オランダ、1632年)、クリスチャン・ファンダメンタルズ(1921年)、メノナイト信仰告白(1963年)です。

ジェネラルカンファレンス・メノナイト教会は、メノナイト教会にそのルーツを持つ数グループが、後にヨーロッパから[アメリカへ]移住して来たスイス・メノナイトやドイツ・メノナイトのグループと連合し、1860年に結成されました。その後、ジェネラルカンファレンスは、アメリカ、カナダ両国におけるオランダ・プロシャ[ドイツ]系の群れをいくつか加えていきました。ジェネラルカンファレンス内のグループでは、長文のリス信仰告白(オランダ、1776年)が広く用いられて来ました。1896年、ジェネラルカンファレンスは「共通の信仰告白(コモン・コンフェッション)」を採択しています。また、1941年には、3年毎に開催されるジェネラルカンファレンス会議で、新しい神学校のための信仰表明も承認しました。

これらのメノナイトの信仰告白は、教会にとってどのように役立つのでしょうか。第一に、これらは聖書解釈の指針(ガイドライン)になります。しかし、信

仰告白そのものは、やはり聖書の権威の下にあります。第二に、信仰告白は信仰と実践についての手引き(ガイダンス)になります。この点について、成文化された信仰表明というのは、信仰の実践的な証しを裏づけるべきものであって、実践的な証しの代わりをすべきものではありません。第三に、信仰告白は教会内及び教会間の一致のための基盤を形成します。第四に、信仰告白は新しい教会員を教えるための、また求道者と知識を分かち合うための概説(アウトライン)になります。第五に、信仰告白は変わり行く時代のただ中にあって信仰と実践に関する時代に即した解釈を与えます。第六に、信仰告白は他[教派]のクリスチャンや他[宗教]の人たちと、メノナイトの信仰や実践について話し合うときの助けになります。

この信仰告白は、構成としては、伝統的なパターンに従っているところもありますが、私たちアナバプテストの遺産に合わせて新しい要素も取り入れています。これまでのものと同じく、この信仰告白は箇条を連ねる形式で編纂されました。これらの箇条は4部構成であるのが分かります。第1部の8箇条(1-8条)は、より広範囲のキリスト教会が持つ信仰に共通するテーマを取り扱っています。第2部(9-16条)は、教会とその実践について、さらに第3部(17-23条)は、弟子であること[弟子の道]について取り扱っています。最後の箇条(24条)は神の統治についてです。それぞれの箇条が、ここでの順序に関係なく、いずれもこの信仰告白に重要な貢献をしています。この信仰告白では、どの箇条も最初の段落で要約を述べており、箇条の後に解説があります。また、箇条の題目には、従来の信仰告白に見られるものが多くあります。しかし、中には「キリスト者の霊性」という新しい表題のものもいくつかあります。最終的には、これまでの信仰告白と同じように、これらの箇条は聖書本文に基づくものです。引用した聖句は新改訂標準訳(NRSV: the New Revised Standard Version)によります。

この『メノナイトの見地による信仰告白』は、1995年7月25日-30日、カンサス州ウィチタで開催された米国ジェネラルカンファレンス・メノナイト教会と米国メノナイト教会の代表者会議で採択されました。これら24箇条と要約版[別添]は、教会生活における指導と育成のための信仰表明として双方のグループによって受け入れられました。その解説についても、信仰告白を明確にするのを助け、適用を例示するものとして支持されました。添付の礼拝用朗誦文は、この信仰告白が教会において広範囲の用いられ方があることを示す見本です。

この信仰告白は、メノナイト教会とジェネラルカンファレンス・メノナイト教会の信仰と生活を導きます。さらに、この『メノナイトの見地による信仰告白』は、すべてのキリスト教会に、そして他宗教の信者に、あるいは信仰を持っていない人にも向けられています。それは、彼らがこの見地に立ってイエス・キリストの福音が主張していることを真剣に考えてくれるようになるためです。

願わくは、これらの信仰箇条によって私たちが励まされ、私たちの告白する希望を揺るぎなく堅持できますように。約束された方は真実であられるからです(ヘブル10:23)。 讃美と感謝を私たちの神に捧げます。

1995年

米国ジェネラル カンファレンス メノナイト教会 (GC) 米国メノナイト 教会 (MC)

第1条 神

私たちは、神が臨在なさり、信仰によって近づくすべての人々を喜んでくださると信じます¹⁾。私たちは、永遠に父・子・聖霊である、唯一の聖にして愛である神を礼拝します²⁾。私たちは、神が、見えるものと見えないもののすべてを創造され、イエス・キリストによって人間に救いと新しいいのちをもたらし、終わりの日まで教会と万物を支え続けてくださると信じます。

アブラハムとサラを初めとして、神は、信仰の民を呼び求め、神のみを礼拝するように、また、人とすべての被造物に対する神の御目的を証しし、自分自身のように隣人を愛するようにと喚起なさいました³⁾。私たちは、イエス・キリストの忠実さを通して、また、聖霊が私たちを動かしてくださったとき、イエス・キリストを救い主、主と告白することによって、この民に加えられました⁴⁾。

私たちは、神が人知をはるかに超えた方であることを謙虚に認めます⁵⁾。私たちはまた、神が多くのさまざまな方法で人間に語りかけ、私たちに関わって来られたことを認めて感謝します。私たちは、神が、なによりもその独り子、すなわち肉となり、神の臨在と特質を明らかにした言(ことば)である方によって語られたと信じます⁶⁾。

神の荘厳な栄光と絶えざる憐れみは、聖なる愛において完全です。神の至上の力と尽きざる慈しみは、全能なる愛において完全です。すべてを知る神の知識と被造物への御配慮は、保全なさる愛において完全です。神の豊かな恵みと罪深さへの怒りは、義なる愛において完全です。神の赦しの御心とつくり変える力は、贖いの愛において完全です。神の限りなき正義と人類への継続的な忍耐は、苦難の愛において完全です。神の無限の自由と変わらぬ自己犠牲は、誠実なる愛において完全です⁷⁾。唯一の聖にして常に愛なる三位一体の神に、栄光が永遠にありますように。

- 1) 出エジプト3:13-14、ヘブル11:6
- 2) 出エジプト20:1-6, 申命6:4, マタイ28:19, Ⅱコリント13:13
- 3) 創世記12:2-3, レビ19:18, ローマ4:11-25, Iペテロ3:9-11
- 4) ガラテヤ2:20, ローマ3:22
- 5) 出エジプト3:13-14, ヨブ37章, イザヤ40:18-25, ローマ11:33-36
- 6) ヨハネ1:14, 18, ヘブル1:1-4
- 7) 出エジプト20:4-6, 出エジプト34:5-7, 詩篇25:4-10, イザヤ6章, イザヤ54:10, マタイ5:48, ローマ2:5-11, ローマ3:21-26, Iヨハネ4:8, 16

解説

1)啓示により私たちが神について分かっていることと、神が本当にどのような方なのかということとは合致していると私たちは信じます。神は父、子、聖霊であると告白することは、御子と聖霊が完全に神であると告白することです。それはまた、神は一人であること、そして神が一人であるとは、父、子、聖霊が一体であることを告白することでもあります(例: 30、30, 30,

神を父、子、聖霊として告白することは、創造、救い、究極の完成における共働の御業を強調することでもあります。神のこのような三位一体性の理解は、倫理についても言えることです。創造主である神から私たちが受ける倫理的規範は、贖い主である神から啓示される倫理的規範と相反するものではありません。例えば、創造主である神はクリスチャンが暴力に加担するのを正当化しているのに、贖い主である神は暴力によらない平和つくりを求めているなどと主張することはできません。人間の行いについて創造主が意図しておられることは、イエス・キリストにおいて余すところなく完全に示されました。

初期のキリスト教信条の中には、神の三位一体性についての理解を、本質、実体、あるいは位格という言葉で表現しているものもあります。メノ・シモンズやピルグラム・マーペックなど初代アナバプテストは、三位一体の神を指すため主として聖書にある言葉を用いました。彼らはまた、初期のキリスト教信条の概念もいくつか用いています。これまでのメノナイトの信仰告白の中には、神を指すとき聖書にある言葉だけを用いたものもありましたが、一方では、聖書にある言葉と信条にある用語の両方を用いたものもあります。この信仰告白は、大部分は聖書にある言葉を用いていますが、従来の信仰告白と基本的に一致するものだと考えています。この箇条の中で、"三位一体"という語を用いていますが、これは聖書の中にはありません。しかし、聖書に啓示された、その神を表すのにふさわしい用語であり、聖書に基づく神学と倫理のバランスを保つのに役立っています。

2) 神と信仰の民との関係は、私たちが神の啓示を受けてきた背景をなし、神を理解するための根底となるものです。神についての私たちの知識は、主としてこれらの関係とその歴史から得られるもので、その歴史はアブラハムとサラの家族を

召し出したことから始まりました。(ヘブル 11:8-12を参照し、最古の写本の11 節に注目。「信仰によってサラは子を宿す力を与えられました。なぜなら彼女は約束なさった方が真実な方であるとみなしたからです。」) それと同時に、私たちが告白するその神は、全被造物と人間すべての唯一無二の真の神であると私たちは信じます。ある特定の民を召し出す前から、神は創造を通して人間に啓示されており、人間に語りかけておられます。

3) 神は、人間の理解を超える存在であるとともに、啓示を通して正しく認識できる存在でもあります。神についての私たちの知識は、これらの緊張関係の中にあります。そのうえ、神の持つ特性(あるいは"属性")は、私たちにとって、ときには矛盾しているように見えることがあります。例えば、神はどのようにして義であるとともに慈しみ深くあることができるのでしょうか。そのような特性は、人間の経験からすると相反しているように見えます。しかし、神の中ではこれらの属性は完全に統合されていると私たちは告白します。聖書によれば、最終的には神の愛が、神の他の属性に比べていくらか優先しているところがあります。第1条では、このことを強調するために、"義"と"愛"を対抗させるのではなく、あるいは一方に焦点を当てて他方を無視するのでもなく、"義なる愛"という表現を取っています。

第2条 イエス・キリスト

私たちは、肉となった神の言(ことば)であるイエス・キリストを信じます。 イエス・キリストは世の救い主であり、御自分を卑しくし、十字架上の死に至るま で従順であることによって私たちを罪の支配から解放し、神と和解させてくださ いました¹)。イエス・キリストは、死者の中からよみがえることによって、公に力 ある神の子と告げられました²)。イエス・キリストは、教会のかしら、高く上げら れた主、ほふられた小羊であり、神と共に統べ治めるため栄光のうちに再び来ら れます。"だれも、据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできま せん。その土台とは、イエス・キリストです³)。"

私たちは、イエスをキリスト、すなわちメシアと告白します。神は、この方を通してすべての人々に新しい契約を備えられました。イエス・キリストは、ダビデの子孫から生まれ、イスラエルを通して与えられたメシヤの約束を成就されます⁴⁾。イエス・キリストは、預言者として、神の国の到来を告げ知らせ、すべての人に悔い改めを呼びかけました。イエス・キリストは、神の知恵を持つ教師として、人間の行いに対する神の御心を知らしめました。イエス・キリストは、忠実な大祭

司として、罪に対する最終的な贖いをなし、今や私たちを執り成しておられます。 イエス・キリストは、十字架の道を選んだ王として、神の力を持つしもべの性格を お示しになりました⁵⁾。

私たちは、イエス・キリストを世の救い主として受け入れます⁶⁾。イエス・キリストは、その説教と教えと癒しの働きによって、近くにいる人々にも遠くにいる人々にも罪の赦しと平和を告げ知らせました⁷⁾。イエス・キリストは、御自分に従うようにと弟子たちを招き寄せて、新しい信仰共同体を始められました⁸⁾。イエス・キリストは、苦難に会われたとき、その敵を愛し、暴力をもって抵抗することはなさらず、それによって、私たちが従うべき模範をお示しになりました⁹⁾。イエス・キリストは、十字架の上で血を流すことにより、父なる神に御自分のいのちまでも差し出され、すべての人の罪を負われ、私たちを神と和解させてくださいました¹⁰⁾。それから神は、死者の中からイエスをよみがえらせ、それによって、死に打ち勝ち、罪と悪を支配する諸力の武装を解除なさいました¹¹⁾。

私たちは、イエス・キリストが神の独り子であり、肉となった神の言(ことば)であると認めます。イエス・キリストは聖霊によって宿り、おとめマリヤから生まれました。イエス・キリストは、私たちと同じように完全に人間で、誘惑にも遭われましたが、罪なき方であり、人の模範です¹²⁾。イエス・キリストは、完全に神であり、神の完全さをあますところなく宿された方です。イエスは地上での生涯において、天におられるアバ(父)と親密な関係にあり、弟子たちに「アバ、父よ」と祈るように教えました¹³⁾。イエスは、見えない神のかたちであり、"すべてのものは、その方を通して、その方のために造られました。すべてのものが造られる前から存在しておられる方だからです¹⁴⁾。"

私たちは、イエス・キリストを御自身のからだである教会のかしらとして認めます 15 。そのからだの器官として、私たちは、キリストの中におり、キリストが私たちの中に住んでおられます。キリストとのこのような親密な関係により力を与えられ、うちひしがれた世にあって、教会は慈しみと正義と平和をもたらすキリストの御業を続けます 16 。

私たちは、神が高く上げ、万物の主とされた方としてイエス・キリストを礼拝します。イエス・キリストは、私たちの主ですが、この世ではまだ主と認められてはいません。私たちは、すべての人間を裁き給う方として、主が再び来られることを確信して生きます。イエス・キリストは、万物の主と認められるべき方であり、永遠に統べ治め給う小羊です¹⁷⁾。

1) ピリピ 2:5-8

- 2) ローマ1:4
- 3) I コリント3:11
- 4) **Ⅱ**サムエル7:13-14, イザヤ9:1-6, ローマ1:3, **Ⅱ**コリント6:18
- 5) イザヤ42:1-9, マタイ4:17, ルカ4:43f, マタイ5-7, ヘブル2:17, Iペテロ
- 3:18, ローマ8:34, ヘブル7:25,

ヨハネ18:36-37, 黙示5:8-14, 7:17

- 6) 使徒4:12、 I ヨハネ4:14
- 7) エペソ2:13-22,
- 8) マルコ3:13-19
- 9) マタイ26:50, Iペテロ2:21-23
- 10) ルカ23:46, ローマ5:18, Ⅱコリント5:19
- 11) コロサイ2:15, エペソ1:20-21
- 12) ヘブル4:15, ローマ5:14-21, Iペテロ2:21
- 13) マルコ14:36, マタイ6:9-13, ローマ8:15, ガラテヤ4:6
- 14) コロサイ1:15-17, 19
- 15) エペソ1:22-23
- 16) コロサイ1:24
- 17) 使徒17:31, ピリピ2:11, 黙示5:12-14

解説

- 1) この箇条は、アナバプテスト・メノナイトの見地によるイエス・キリストについての聖書的理解を反映しています。ここで強調されているのは、例えば、イエスの贖いの御業における従順と苦難、高挙にいたる道としての謙卑としもべの姿、信仰共同体における信徒たちのキリスト体験、信仰と倫理の統合、キリストの性格の中心にある平和などです。これらのテーマは福音の核心に属するものです。
- 2) プロテスタントの伝統の中には、メシヤ(油注がれた方)を預言者、祭司、 王と同一視する見方もあります。旧約の時代には、その職務につくために人々は 油を注がれたからです(イザヤ61:1,出エジプト29:29, Iサムエル10:10)。こ の信仰告白では、旧約聖書の知恵文学(例えば、数篇の詩篇、箴言、ヨブ記、伝 道の書など)を背景にして、イエスを教師ともみなしています。私たちは、弟子 として、キリストの持つこの四重の御業に参与します。
- 3) 何世紀にもわたり、キリスト教の信条は、イエス・キリストには人間の性質も

神の性質もあると告白してきました。聖書ではイエス・キリストを述べるのに"性質"という言葉を使ってはいません。私たちはこの言葉を使うとき、人間としての側面と神としての側面のどちらか一方を過度に強調すべきではありません。イエス・キリストに関するこのような言い方は、イエスついて聖書が私たちに示している事を支持するときには役に立つこともあります。

4)神の子として、イエス・キリストは三位一体の神の持つ御性格と御業を完全に共有しておられます(マタイ11:27,ヨハネ1:1-3,7-8,コロサイ1:15-20,エペソ1:3-4)。例えば、聖書は、キリストが創造の御業に参与していたこと、すなわち、キリストは初めから神と一体であったと教えています(コロサイ1:16)。イエス・キリストが御父を通して聖霊と親密な一体をなしていることは、弟子たちに対するイエスの慰めの言葉で明らかです。イエスは言われました。「御父はわたしの名によって助け主である聖霊を送ってくださいます。その方は弟子たちを教え、わたしが語ったことを思い起こさせてくださいます。」(ヨハネ14:26)イエスは、地上にいる間、神に向かってアラム語で親愛の情を表す"アバ"という言葉で呼んでおられました。それは当時父と子の親密な関係を表すときに使われるもので、今日の"パパ"と同じです。

第3条 聖霊

私たちは、神の永遠の霊である聖霊を信じます。聖霊は、イエス・キリストの内に宿り、教会に力を与え、キリストにある私たちのいのちの源であって、私たちの贖いと被造物の贖いの保証として、信じる者たちの上に注がれます。

神の霊を通して、世界は創造され、預言者と聖書記者は霊感を受け、人々は神の律法に従うことができるようにされ、マリヤは身ごもり、イエスは洗礼(バプテスマ)を受けたときに油を注がれました¹⁾。聖霊の力によって、イエスは神の統治という良き訪れを告げ知らせ、病める者を癒し、十字架上の死を受け入れ、死者の中からよみがえられました。

五旬節 (ペンテコステ) のとき、神はすべての人に御霊を注いで、多くの国々の中から教会を集め始められました²⁾。聖霊の住み給う宮として、教会は神をほめたたえ、礼拝し、御霊の実を結びます。聖霊の賜物によって、すべてのキリスト者は自分に与えられた特別の務めを行うように召されています。聖霊の導きによって、教会は教義と行いにおいて一致するようになります。聖霊の力によって、教会は、その主であるイエスの模範に従いつつ、説き、教え、証言し、癒し、愛し、苦しみを受けます。

聖霊は、人々に悔い改めを求め、罪を悟らせ、御霊の働きに心を開くすべての人々を義の道へと導きます³)。聖書は、御霊に従うように、また御霊に逆らったり御霊を消したりしないようにと私たちに勧めています⁴)。水と御霊によって、私たちは新たに生まれて神の家族に加えられます。御霊は、神の子の一人ひとりの中に宿り、神との交わりに入らせてくださいます。私たちがキリストと共に栄光をも受けるため、キリストと共に苦しむなら、御霊の内住によって、私たちはキリストと共同の相続人とされます⁵)。御霊は、私たちを教え、イエスの御言葉を思い起こさせ、全き真理へと導き、神の言葉を大胆に語る力を与えてくださいます⁵)。

聖霊は、キリスト者の共同体における私たちの生活を可能にし、苦難の時には 私たちを慰め、迫害の時には私たちと共におられ、弱っている時には私たちのた めに執り成しをされ、私たちのからだの贖いを保証し、将来における被造物の贖 いを確証してくださいます⁷⁾。

- 1) 詩篇104:30, ミカ3:8, エゼキエル36:26-27, ルカ1:35, 3:22
- 2) ヨエル2:28-29, 使徒2:16-18
- 3) ヨハネ16:8-10
- 4) イザヤ63:10, 使徒5:3, エペソ4:30, Iテサロニケ5:19
- 5) ヨハネ3:5, ローマ8:14-17
- 6) ヨハネ 14:26, 16:13, I コリント 2:14, 使徒 4:24-31
- 7) マタイ 10:20, Ⅱコリント 5:5, ローマ 8:26-27, エペソ 1:13-14, ローマ 8:18-23

解説

1) 聖書によると、神の霊は、この世における神の臨在とそこに働く力です。神の霊、すなわち神の息は、創造のときに活動されましたが(創世記1:2)、今も世界中において、予期される所でも予期されない所でも、創造の御業を続けておられます。神の霊は、力の源であって、預言者やそのほかの聖徒に神の知恵を啓示されました。御霊の力によって、イエスは病める者を癒し、汚れた霊を追い出し、神の統治を宣言なさいました(マタイ12:28、ルカ3:22、5:17)。その同じ御霊によって、イエスは、御自分のいのちを神にお捧げになり(ヘブル9:14)、死者の中からよみがえられました(ローマ8:11)。この神の霊とイエスの霊が聖霊であり、父と御子と共におられる方です。

- 2) ヨハネの福音書 (1章-16章) とパウロの手紙は、神の霊の働きやイエスの霊の働き、あるいは御霊とキリストの働きを記述するのに同じような言葉を用いています。それぞれに個別の役割がありますが、キリストが天に上げられて以後、聖霊の働きは、常にイエス・キリストと一致しています。それゆえ、キリストこそどの霊が神からの霊であるかを見分ける基準になります(Iコリント12:3、ヨハネ14:26、Iヨハネ4:2-3)。私たちが聖書を通して知っているように、イエス・キリストに一致する霊だけが、私たちの信仰と生活を確実に導くことができます。
- 3) 新約聖書は、イエスのよみがえり以後、私たちが、この世において神の行動なさる新しい時代、すなわち御霊の時代に生きていると確言しています。御霊は、もはや少数の人たちとだけ共におられるのではありません。御霊は、今や"すべての肉"に、すなわち、男にも女にも、若人にも老人にも、奴隷にも自由人にも(使徒2:16-21)、神の民として集められているあらゆる民族的背景の人々に注がれています(使徒10章-11章)。聖霊によって、神の愛が私たちの心の中に注がれています(ローマ5:5)。私たちは、神の子として養子に迎えられ(ガラテヤ4:6-7)、新生を経験して神の家族とされています。このような聖霊の臨在は、"キリストに在ること"、すなわち、キリストのからだの一部であることと結びつけられます。
- 4) 聖霊の油注ぎは、すべての人に与えられます。しかし、悪を行う人は、その行いが明るみに出るのを恐れて、光のもとへは来ません(ヨハネ3:17-21)。罪を悔い改めて(使徒2:38) 光のもとへ来ようとしている人は、御霊を受ける人です。私たちが心の貧しい者になっているとき、すなわち十字架の道とは無縁のものをすべて捨てて、愛の生活と神への奉仕に専心しているとき、私たちは、自分の中で働く御霊に対して最も心を開いています。それと同時に、聖霊は、大胆に御言葉を宣べ伝え、敵を愛し、望みを抱いて苦しみを受け、試練のときにも信仰を持ち続け、すべての事について喜ぶことのできる力を、私たちに与えてくださいます。私たちが御霊によって歩むとき、御霊の結ぶ実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です(ガラテヤ5:22-23)。
- 5) 教会も個々の信徒も聖霊の宮です(エペソ2:22、Iコリント6:19)。キリストの霊は、祈りと讃美のために集まる教会のただ中におられます。教会員それぞれに与えられた聖霊の賜物によって、教会は愛のうちに自らを建て上げ(エペソ4:1-16、Iコリント12章-13章)、聖霊による一致を与えられます。聖霊の導きによって、教会は意思を決定し、戒規を行い、教会員を励まします。

6) 預言は、聖霊によって教会に与えられる賜物の一つです(Iコリント12:28、ローマ12:6、エペソ4:11)。しかし、キリスト者の中には、預言と啓示は使徒の時代で終ったと主張している人もいます。彼らは、聖霊が引き続き真理を明らかにする主な方法は、私たちの聖書解釈を助けることを通してであると言います。またあるキリスト者は、現在の啓示は聖書と対等の根拠に基づくか、あるいは聖書より優先さえすると主張しています。

私たちは、聖霊が神の御心を私たちに啓示し続けておられるのを、聖書によって知っています(Iコリント 14:26-33)。現在、神の霊は沈黙なさってはいません。しかし、この新しい啓示は、聖書で私たちが知っているキリストの方法と矛盾することはないでしょう(ヨハネ 14:26)。それゆえ、聖書を通してキリストに与えられている基準によって、啓示と預言を信仰共同体において吟味する限り、私たちはそれらに対して心を開くことができます。

第4条 聖書

私たちは、聖書はすべて、救いの教えと義の訓練のために、聖霊を通して、神によって霊感されていると信じます。私たちは、聖書を神の言(ことば)として、またキリスト者の信仰と生活のための、完全に依り頼み、信頼できる規準として受け入れます。私たちは、教会において聖霊に導かれつつ、イエス・キリストと調和させて聖書を理解し、解釈するように努めます。

私たちは、旧・新約聖書の各巻が御霊の導きによって書かれた過程で、神が数世紀にわたって働いておられたと信じます¹⁾。神は、聖霊を通して、救いのため、信仰と生活の手引きと神への献身のために、必要なことを書こうとして証人を動かされました²⁾。

私たちは、書かれた神の言として聖書を受け入れます。神は、預言者や使徒を通して、多くのさまざまな方法でお語りになりました³⁾。神は、とりわけ、肉となって神の真理を忠実に、偽りなく啓示した生ける言(ことば)によって語られました⁴⁾。私たちはまた、聖書が人間の言葉で書かれた完全に依り頼み、信頼できる神の言であると認めます⁵⁾。私たちは、神が生ける書かれた言(ことば)を通して語り続けておられると信じます⁶⁾。イエス・キリストは肉となった言(ことば)ですから、聖書全体はイエス・キリストに中心があり、イエス・キリストにおいて成就しています⁷⁾。

私たちは、聖書が、信仰と生活について説き、教え、真理と誤りとを区別し、 善と悪とを見分け、祈りと礼拝を導くための権威ある拠りどころであり、規準で あると認めます。ほかに、伝統、文化、体験、理性、政治権力など、キリスト者の信仰と生活に関して私たちの理解を求めるものがあれば、聖書の光に照らして吟味され、正される必要があります⁸⁾。

聖書は、教会の根幹をなす書物です。聖書を通して、聖霊はイエス・キリストへの従順な信仰を育み、教会がその教えと証しと礼拝を具体化するように導きます。私たちは、ひたすら聖書を読むこと、学ぶこと、黙想することを固守し、それを喜びとします⁹⁾。私たちは、聖書を解釈することと、聖書の光に照らしてすべての事柄を吟味することにより、今の時代に神が語っておられる事を見分けることで、教会の業に参与します¹⁰⁾。私たちが聖書解釈に持ち込む洞察や理解は、信仰共同体の中で吟味されるものです。

- 1) エレミヤ30:2、エレミヤ36章、Ⅱテモテ3:16
- 2) Ⅱペテロ1:21
- 3) 出エジプト20:1、エレミヤ1:9-10、ガラテヤ1:11-12、ヘブル1:1
- 4) ヨハネ1:14、18、黙示19:13
- 5) 箴言30:5、ヨハネ10:35
- 6) イザヤ55:10-11、ヨハネ20:31
- 7) マタイ 5:17、ルカ 24:27、使徒 4:11
- 8) マルコ7:13、使徒5:29-32、コロサイ2:6-23
- 9) 詩篇1:2、Ⅰテモテ4:13、Ⅱテモテ3:15-17、
- 10) 使徒15:13-20、ヘブル4:2-8、12

解説

- 1) 聖書によれば、"主の言(ことば)"、"神の言(ことば)"、"言(ことば)" という表現は次のことを指しています。
 - ・神が旧約と新約における人々、特にモーセ、預言者、使徒を通して伝えたメッセージ (例:出エジプト20:1、エレミヤ1:9-10、使徒13:44-47)。
- ・神の国についてのイエスの宣言(例:ルカ4:43-5:1)。
- ・イエス・キリストによって語られた福音(例:使徒8:25、18:5、コロサイ1:25 -27、I テサロニケ2:13)。
- ・イエス・キリストにおいて肉となった神の生ける言(ヨハネ1:1、14)。
- ・文書にされた神からの言 (例:エレミヤ36:4、ヨハネ15:25、ヘブル4:1-12)。

したがって、聖書は神の言(ことば)であると言うことによって、第一に、聖

書における"言(ことば)"の豊かさと範囲とを強調していることになります。"神の言"という表現を書き記された形式だけに限定すると、聖書の全体的な証言が見えなくなります。第二に、聖書は書かれた神の言であると言うことによって、私たちは教会に対する聖書の権威を認めています。信仰と生活に関する事柄について、ほかに権威ある言葉だと主張しているものがあれば、すべて、信仰共同体の中で、聖霊の導きを通し聖書によって評価され、正されなければなりません。

- 2) 聖書の権威は、神にその究極の根源があります。神は、教会と教会員の生き方における具体的な目的のために、聖書の権威を霊感(息吹き)されました(II テモテ 3:16-17)。教会は聖霊の権威を告白し認めますが、教会には聖書に権威を与える権利はありません。正確には、神がどのように聖霊を通して聖書に霊感を与えたかは、聖書には説明されていません。したがって、私たちは、聖書に霊感を与えた方は誠実であり真実な方であるので、聖書は完全に依り頼み、信頼できると確信するだけで十分なのです。
- 3) 私たちは旧約39巻、新約27巻を霊感された聖書に属するものとして認めます。私たちが旧約と呼ぶものは、イスラエル民族により信仰と生活の規準として三つに分けられ、数世紀にわたり受け入れられました。その三つとは、律法、預言者、諸書です。紀元4世紀までには、旧約と福音書、パウロ書簡、それと徐々にですが、新約の残りのものが、聖書として広く教会に認められることになりました。
- 4)16世紀のヨーロッパでアナバプテストによる宗教改革が始まって以来、メノナイトはプロテスタントによる宗教改革を取り入れたり、それとは異なったりしながら、聖書に従う民であろうと努めて来ました。メノナイトは伝統的なプロテスタントと共に、教理に関する聖書の権威を強調してきました。それに加えて、メノナイトが強調してきたのは次の点です。
- ・倫理、社会と教会の関係、教会政治に関する聖書の権威。
- ・イエス・キリストの生涯、教え、死、よみがえりが聖書全体を理解するうえで 不可欠であるという意味で、イエス・キリストと調和する聖書解釈。
- ・聖書の個人的な理解と解釈とが吟味される場としての信じる者の集会。 この信仰告白も、これらの強調点を踏まえて確言するものです。

第5条 創造と神の摂理

私たちは、神が天と地とその中にあるすべてのものを創造されただけではなく

1)、被造物を保全し、新しくされると信じます。すべての被造物は、究極的には それ自体の中にその源があるのではなく、創造主に属しています。世界は良いも のとして造られました。それは神が善き方であり、いのちに必要なものをすべて 備えていてくださるからです²⁾。

私たちは、宇宙はただ神の愛と神の主権的自由のみを表すものとして存在するようになったと信じます。被造物は神の永遠の力と神性を証しします。神はいのちに意味と目的を与え、神のみが礼拝と讃美に値する方です³⁾。

私たちは、神が被造物を継続と変化の両面から保持されると信じます。私たちは、神が被造物の秩序を重んじ、人間と世界を保全し新たにされるため、罪と悪の諸力を抑制すると信じます⁴⁾。神はまた人と世界を、死と破滅から救い、罪と悪の諸力に打ち勝つために働かれます。

それゆえ、私たちは、被造物の自然の秩序を尊重し、逆境のときも豊かなときも私たち自身を神の御配慮と御加護に委ねるように求められています。人の手の業も、私たちを取り巻く自然界の力も、私たちの住む諸国の力も、創造主に与えられるべき信頼と栄誉にふさわしくはありません。それらの業も力も創造主に依存するものです⁵⁾。

- 1) 創世記1:1、イザヤ45:11f、ヨハネ1:3
- 2) 創世記1:31、 I テモテ 4:4
- 3) 詩篇 19:1-6、ローマ 1:19-23
- 4) 創世記 9:8-17、詩篇 104、エペソ 3:9-11
- 5) 詩篇 33、マタイ 6:25-33、マタイ 10:26-31

解説

1)神を創造主と告白するとき、私たちは聖書に従って、一人にして三位一体の神、すなわち父・御子・聖霊なる神を指しています。創造は三位一体の神の御業であると理解すべきであって、父なる神だけ、御子だけ、あるいは聖霊だけの御業であると理解すべきではありません(ヘブル1:2-3、コロサイ1:16、 I コリント8:5-6、ヨハネ1:3、14-18)。

神について語るとき、言い方によっては、創造主としての三位一体の神を完全に告白することにはならないこともあります。例えば、神を"父・御子・聖霊"と呼ばずに、ただ単に"創造主、贖い主、助け主"と呼ぶのは、"父"だけが創造主であり、"御子"だけが贖い主であり、"聖霊"だけが助け主であるという誤った理解を助長するかもしれません。

2) 私たちは、創造を神の"表現"と言います。なぜなら、聖書が創造について言及するときは、神の言(ことば)によっているからです(創世記1章、詩篇148:5、ヨハネ1:1f、ローマ4:17)。聖書の時代における他の宗教の創造物語によると、世界は神あるいは神々の延長として存在するようになります。これらの物語では、世界は神性を共有しているか、世界そのものが神なのです。それに対して、神の言(ことば)によってなされた聖書の創造物語は、神である創造主と被造物とをはっきりと区別しています。聖書は被造物と創造主の混同や、あるいは世界に神性があることを否定しており、それは聖書がいかなる形の偶像も退けていることと一致します(イザヤ45:12-21、使徒17:22-29)。

私たちは、神が宇宙の創造主であると告白するとき、世界は神なくして存在するようになったという考えを拒否しています。あるいはまた、神は創造の前から存在していたあるものを用いて世界を造られたという見方や、物質は神と共に不滅であるという見方を、私たちは受け入れません。聖書では、神は他のいかなるものも存在しないときにおられたことは明白です。このように、"創造する"という旧約の言葉も聖書全体の証言も、神学でいうところの"無からの創造"という意味を含んでいます。

創造主として、神は究極的に大地の所有主です。神に立てられた管理人として 心を配るため、神は人に大地を与えてくださいました。これについては、"創造と 人の召命"(第6条)と、"キリスト者の管理の務め (スチュワードシップ)"(第 21条)を参照してください。

3) 神は世界をなるがままに放っておくことはなさらず、継続的に維持、管理しておられます。罪と悪とが神の原初の被造物を損ないましたが、神は、いのちを維持し、悪の諸力を抑制するため、自然界の秩序、家族、文化、それに社会的、政治的組織などを用い続けておられます(創世記4:15、詩篇34、イザヤ19:12-25、マタイ6:25-30、ヨハネ5:17、コロサイ1:15-17)。たとえ自然災害が世界に大きな破壊を引き起こしても、神は被造物と人間が全滅することのないように保全を続けておられます(創世記8:21-22)。それゆえ、私たちは、苦難、迫害、あるいは死さえもたらすことのある自然の威力と他の人とに対する恐怖に打ち負かされる必要はありません。

私たちは、自らの安全を科学技術や自然界の力や居住する国の中に探し出すよりも、むしろ自らを神の御配慮に委ねることを求められています。自然、社会、科学技術の資源については、神の御目的と調和して、人間生活の質と私たちを取

り巻く世界の質を維持し、高める限りにおいて、また、神意による配剤への信頼 を損なわない限りにおいて、私たちはそれらを受け入れ、利用します。

4)神は世界を保全なさるだけではなく、選ばれた民を悪から救うため、またすべての民とその他の被造物とを祝福するため行動をも起こされます。神は、ヘブル人をエジプトでの奴隷状態から解放し、食物を供給し、シナイ山で十戒の啓示に付随させ、住む場所を備えるために、自然力を利用されました(出エジプト6章-16章、19章、詩篇124篇、136篇)。

神は、絶えず新しい驚くべき方法で御業をなさるので、創造にはいつも変化があります。神はまた、契約した民とすべての国々のために、御業をなさって創造に新しさをもたらします(イザヤ 42:5-9、44:21-28)。教会と世界において、イエス・キリストにあってなされ、聖霊の御業を通してなされる創造の回復については、"救い"(第8条)と"神による統治"(第24条)を参照してください。

第6条 人の創造と召命

私たちは、神が人を神のかたちに創造なさったと信じます。神は地のちりから 人を形づくり、すべての創造の御業の中で、人に特別の尊厳をお与えになりまし た。人が造られたのは、神と関係を持ち、互いに平和に生き、ほかの被造物を管 理するためでした。

私たちは、人が神のかたちとして良いものに造られたと信じます¹⁾。私たちは、神の似姿に造られたものとして、創造主への崇敬と敬意をもって被造物を従わせ、心を配る管理人とされました²⁾。私たちは、神のかたちに造られたものとして、神に忠実に応答し、ほかの人と協調して生き、有意義な働きと休息に与ることのできる能力を、祝福によって与えられました。アダムもエバもどちらも平等に、すばらしく良く神のかたちに造られたので、神の御心は、初めから、男と女とがそれぞれ愛し合い、互いに助け合う関係によって生きることでした³⁾。

私たちは、神が忍耐をもって人間を保護し、死のときでさえも共にいてくださることを感謝いたします⁴⁾。神は、人間の救いと被造物の贖いを備えてくださいました⁵⁾。私たちは、神のかたちがイエス・キリストにおいてあますところなく示され、かつ回復され、イエス・キリストの中に、私たちの真の人間が見られると信じます⁶⁾。

- 1) 創世記1:26-27、ローマ8:29.
- 2) 創世記1:26-30、詩篇8:5-8、ローマ1:21-23.

- 3) 創世記 2:18-23、エペソ 5:21-33.
- 4) ローマ8:38-39.
- 5) ローマ8:19-25.
- 6) Ⅱコリント4:4、コロサイ1:15

解説

1) "神のかたち"とは、人と神との特有の関係を指し、したがってまた、人同士に対してと他の被造物に対して持つ独特の関係をも指します。この表現は、その人物が持つある特定の面を指すというよりも、全体としての人を指します。

人に関する神学的な認識の中には、地上における神の代理人として、大地を管理し、心を配るための人間の役割に焦点を当てるものもありました。また中には、三位一体の神との内なる関係の象徴として、男と女の関係を強調するものもありました。そのほか、神との独特の関係を強調し、そのために人は造られたという見方もありました。またあるものは、人と動物との相違点、特に人間の理性、文化、道徳性に焦点を当てたものもありました。これらの見方はいずれも、人間であることを描いたより大きな聖書的な描写の中のある面を強調しているもので、この第6条では、それらを神のかたち及び神の似姿としてまとめています。

2) 創世記1:26-27によると、神は、男も女も神のかたちに創造なさいました。 両者とも神に対しては平等で、男女が互いに関係を持つために造られています。 神に対する女の関係は男に由来するものではなく、また、神に対する男の関係も女に由来するものではありません。創世記2:18は、女を男の"助け手"と記していますが、これには一方的な従属の意味合いはありません。同じヘブル語が、神について"助け"または"助け手"として使われているのがほとんどです(例:申命記33:7、26 詩篇33:20、54:4、70:5、115:9-11)。男が女を支配するのは、罪の結果であり(創世記3:16)、したがって、贖われた人々の間で受け入れられる秩序ではありません(ガラテヤ3:28、「コリント7:4、11:11-12)。

イエス・キリストにあって人間が新たにされると、女も男も共に神のかたちに戻ります。五旬節(ペンテコステ)には、まさにヨエルの預言どおりに、聖霊が男にも女にも注がれました(使徒 2:1-18;および使徒 1:12-14 も参照)。信仰共同体では、異邦人はユダヤ人と、奴隷は自由人と、女は男と身分を同じくします(Π コリント 6:18)。彼らは互いに和合し(ガラテヤ 3:25-28)、互いに仕え合って(エペソ 5:21-6:9)生きるように召されています。

- 3) 私たちは、神が人を造られたとき、神の言葉に従うか従わないかの選択能力を備えてくださったと信じます(創世記2:15-17)。人間は、神との契約関係の絆を選択するか、罪の縄目を選択するかの自由を持って造られています(ローマ6:16-18)。私たちが真に自由であるのは、神との契約を守り、神の御心に従って生きるときだけです。
- 4) 私たちは、神が人間の仕事に意図しておられるのは、創造された世界から搾取することではなく、それに心を配り、整える一つの手段になることであると信じます。仕事は人間の生活を維持し、高めるために必要です。それはまた、イエス・キリストの御霊にあって他の人々に対して仕え、証しする手段ともなり得ます(創世記1:28、2:15, 19-20、IIテサロニケ3:6-13、エペソ4:28、6:5-9)。私たちは、神の御計画に従って、私たち自身の益のためにも、ほかの被造物の益のためにも、仕事と休息のバランスをはかります。とりわけ、仕事を離れて定期的に休息を取るのは、神の臨在と神による創造、解放、癒し、救いの御業を私たちに思い起こさせるためです(出エジプト20:8-11、申命記5:12-15、マルコ3:1-5、ヘブル4:9-11)。

私たちは人生のあらゆるところで神に仕えるよう召されているので、自分が選ぶ仕事においても、自分が行う仕事の方法においても、イエス・キリストに従おうと努めます。なお、"弟子の道とキリスト者の生活"(第17条)、"キリスト者の管理の務め(スチュワードシップ)"(第21条)、"神の統治"(第24条)を参照してください。

第7条 罪

私たちは、アダムとエバに始まり、人間は神に背き、サタンに屈し、罪を犯す道を選び取ってきたと告白します。罪のゆえに、すべての人は、創造主の御心にほど遠く、造られたときの神のかたちを損ない、世界の秩序を壊し、他の人へ愛を限られたものにしました。罪のゆえに、人間は悪と死に隷属させる諸力に身を委ねました¹⁾。

罪とは、神に背を向けて離れることであり、被造物や私たち自身を神々とすることです。私たちは、個人として、また集団として、不義や不正な行いを選択することにより罪を犯します²⁾。私たちは、善を行うのを忘れ、創造主であり贖い主である方に与えられるべき栄光を、神にささげるのを怠ることによって罪を犯します。私たちは、罪を犯すことにより、神および神の民との契約に不忠実となり、正しい関係を壊し、自己中心的に権力を用い、暴力に訴え、神から離れた状

態になります。その結果、私たちは、神を正しく礼拝することができません3)。

罪を通して、支配、分裂、破壊、そして死をもたらすもろもろの力が、人間とあらゆる被造物の中に解き放たれました。その力が、今度は、人を罪と悪の力に屈服させ、つらい労働と無益な休息を増やしました。私たちは罪を犯せば犯すほど、ますます罪に捕らえられるようになります。私たちは、自分の罪によって悪魔の力の束縛に自らをさらしています⁴⁾。 罪とその結果のゆえに、人が自分の力で善をなそうとし、真理を知ろうとする努力は、いつも崩されます⁵⁾。

罪には虜(とりこ)にする性質があって、悪に見られるもろもろの力に明らかであり、その力が、個人や集団を通しても被造物全体の秩序の中にも働いています。これらのもろもろの力、支配的諸霊力、宇宙の諸霊は、人々を正義と公正から引き離すため、しばしば人々を虜(とりこ)にし、政治的、経済的、社会的制度を通して働き、ときには宗教的制度を通してさえ働きます⁶⁾。しかし、神に感謝します。神は、もろもろの力が被造物のうえに君臨するのを許しておくことはなさらず、人間を希望のないままにしておくこともありませんでした。

- 1) 創世記 2:17、3:22、6:11-12、ローマ 1:21-32、6:23
- 2) ダニエル9章
- 3) イザヤ1:12-17
- 4) ローマ6:12-18、エペソ6:10-12
- 5) 詩篇 14:2-4、ローマ 3:9-18
- 6) エペソ2:1-3、ガラテヤ4:1-3

解説

- 1) 罪は現実のことであって、幻想ではありません。私たちは罪を病気のせいにしたり、環境や悪の犠牲者だと言い張るなどして、罪から言い逃れることはできません。罪は自己責任を伴い、現実の結果をもたらします。聖書では、罪と悪に対する責任を男と女にあるとしているだけではありません。それは、さまざまな名前で呼ばれる人格的な力のせいでもあるとされています。"蛇"(創世記 3:1; II コリント 11:3)、"誘惑する者"(マタイ 4:3)、"サタン"(ゼカリヤ 3:1)、"偽りの父"(ヨハネ 8:44)、"悪い者"(マタイ 6:13)、"悪魔"(ヤコブ 4:7)などです。
- 2) そのうえ、"もろもろの力"、"支配的諸霊力"、"諸国の神々"、"宇宙の諸霊"があり、これらは必ずしも悪ではないものの、自分たちのために神の目的を曲げてしまう傾向があります。これらが人間を堕落させ、虜(とりこ)にすることが

あります(イザヤ 42:17; 45:20; ガラテヤ 4:9; エペソ 2:1-3; 6:12; コロサイ 2:15)。このように、罪は個人的な問題だけではなく、集団、国家、機構も巻き込みます。そのような組織には、自分がしたくもない悪を行うように人々を駆り立てる、ある"霊"が存在します。政府、軍隊、経済体制、教育あるいは宗教制度、家族制度、および階級、人種、性別、あるいは国籍によって決められる機構などは、悪霊の影響を受けやすいものです。互いに対して向け合う人間の暴力、人々の間にある敵意、女に対する男の支配、世における生活と仕事の逆境など、これらはすべて人間および全被造物の中にある罪のしるしです(創世記 3:14-19、4:3-16、6:11-13、11:1-9、ローマ 8:21)。

- 3)人々は神の特定の律法を破ることによって罪を犯すだけではなく、神がすべての人に差し出しておられる契約を破ることによっても罪を犯します。契約とは、ある関係を築くための合意のことです。聖書では、神が主導して神の民と契約を結ばれました(ヨシュア 24:16-18、エレミヤ 7:23、31:31-34、ホセア 2:18-23)。信頼、または忠実であること(聖書の原語は同じですが、英語に訳すときは faithか faithfulness)とは、契約関係の中で正しく生きることを意味します。したがって、罪とは、基本的には神との関係に対して不忠実なことであり、神の御心に対する不従順なのです。不義と不正にはあらゆる罪が絡んでいます。聖書の原語は同じですが、英語ではこのどちらかで訳されます。ヘブル語やギリシャ語では、罪の個人的な次元(不義)と、罪の社会的な次元(不正)とを(英語のように)分けてはいません。
- 4) 罪とは人間の状態の一部であり、私たちはすべて罪に関与しています。アダムとエバの罪はすべての人に影響を与えました(ローマ 5:12、19)。けれども、私たちは、自分自身の行為に対する説明責任があります。アナバプテストの指導者ピルグラム・マーペックが書いているように、私たちの最初の両親からどのような遺産を受けていても、私たちは神の御前で自分自身の最終的な責任を免れることはありません(エゼキエル 18 章)。人には自由意志がありますが、選択は限られています。神の恵みによって私たちに与えられた選択の自由は、神と契約関係の絆を選ぶか、それとも、決定的な神からの離反になる罪の縄目を選ぶかです(ローマ 6:16-18)。神を恐れぬばかりか、怒り、肉欲、権力欲、その他これに類することに絶えずとらわれている者は、ゲヘナ(地獄)の破滅に直面していると聖書は厳しく警告しています(マタイ 5:22, 29; 18:9)。なお、"神の統治"(第24条)も参照してください。

- 5) 人間の罪深さは人格全体に影響を及ぼしています。人のある側面、例えば理性、性別、肉体などのどれか一つを選び出して罪深さの主要な媒体とすべきではありません。さまざまな罪深い態度や行為の中に、"肉の欲"に負けることが挙げられています(ローマ 13:14、ガラテヤ 5:16、24、 I コリント 11:18:18-30、ピリピ 3:3-7)。
- 6) 罪が人と人との関係を傷つけたように、罪と悪の結果が人の労働や休息をゆがめてしまいました。労働は神によって呪われてはいませんでしたが(詩篇 104:23-24)、それが理想とされるべきものでもありません。創世記 3:17 によると、神は直接的に労働を呪われたのではなく、"大地"、すなわち罪と悪の影響を受けているような世界で、労働が行われる状態を呪われたのです。

第8条 救い

私たちは、イエス・キリストの生涯と死とよみがえりを通して、神はすべての人に罪からの救いと新しい生き方を与えてくださると信じます。私たちは、罪を悔い改め、イエス・キリストを救い主であり主であると受け入れるとき、神の救いに与ります。私たちは、キリストにあって神と和解し、神の民が和解し合う共同体に入れられます。私たちは、神に信頼します。それは、私たちが、キリストを死者の中からよみがえらせた、その同じ力によって罪から救われて、この世でキリストに従い、来るべき時に完全な救いを知るようになるためです。

神は、初めから、救いをもたらすために恵みと慈しみをもって行動されました。それは、しるしと不思議な業を通して、神の民を救出することにより、イスラエルと契約を結ぶことによってなされました 1)。神は、時満ちるに及んで御子を遣わされるほどに世を愛されました。その御子が十字架の死に至るまで忠実であったことが、すべての人の救いの道となりました 2)。キリストは、私たちのために御自分の血を流すことによって、新しい契約をお立てになりました 3)。キリストは、私たちを癒し、私たちの罪を赦し、悪の縄目と私たちに悪を行うものから救い出してくださいます 4)。キリストは、死とよみがえりによって罪と死の力を打ち破り 5)、私たちの罪の負い目を無効とし 6)、新しいいのちへの道を開いてくださいます 7)。私たちが救われるのは神の恵みによるのであり、自分自身の功績によるのではありません 8)。

私たちが神の愛の福音を聞くとき、聖霊は私たちを動かして救いの賜物を受け 入れるようにしてくださいます。神は強いることなく私たちを正しい関係へと導 かれます。私たちは、神の恵みに委ね、神のみに全幅の信頼を置き、罪を悔い改 め、悪に背を向け、贖われた者の交わりに加わり、言葉と行いにおいて信仰の従順を示すことにより応答いたします⁹⁾。かつては神の敵であった私たちが、キリストを通して神と和解するとき、私たちは、ほかの人たちとの和解、特に教会の中での和解も経験します¹⁰⁾。私たちは、洗礼によって救いを公に証しし、唯一の真の神と神の民である教会に対する忠誠を約束します。恵みと新生を経験するとき、私たちは神の家族に加えられ、ますますキリストのかたちに変えられていきます¹¹⁾。それゆえ、私たちは信仰によってキリストに応え、キリストの道を忠実に歩むように努めます。

私たちがすでに経験した救いは、来るべき救いの事前の体験にすぎず、その時が来れば、キリストは罪と死を打ち破り、贖われた者は神との永遠の交わりのうちに生きることになると、私たちは信じます。

- 1) 詩篇 74:12、申命記 6:20-25、出エジプト 20:1-17
- 2) ヨハネ 3:16、ガラテヤ 4:4、ヘブル 1:1-2
- 3) マタイ 26:28、I コリント 11:25
- 4) ローマ5:1-5、マルコ2:1-12
- 5) ローマ8:2、ヘブル2:14-15
- 6) ローマ3:24、コロサイ2:13-14、マルコ10:45
- 7) ローマ6:4
- 8) エペソ2:8-9
- 9) ローマ1:5、ルカ19:8-10
- 10) ローマ5:6-10
- 11) ローマ12:2、Ⅱコリント3:18

解説

- 1) キリスト教思想史には、贖罪について主な3つの見方があります。それぞれが聖書に基づいており、私たちが贖罪について理解するのに役立ちます。
- ・キリストは、罪と死の力を打ち砕くことにより、悪に対する勝利者である。(キリスト勝利者説)
- ・キリストは、罪の負債を取り消すことにより、私たちのために犠牲となって身 代金を支払う。(代償贖罪説)
- ・キリストは、新しいいのちの道を開くことにより、神の愛を示し、また、私たちにその愛を受けて神とほかの人々を愛するように促す。(道徳感化説)

- 2) 人々が救いを受け入れる時の経験はさまざまです。危機に遭遇して回心する人もいれば、救いの宣教を聞き、信仰共同体によって徐々に育まれてから決心する人もいます。どちらの場合も、救いを受け入れるというのは個人的、自発的な決断です。救いは、私たちがクリスチャンの家庭に生まれるとか、教会の中で育つからといって、ひとりでに得られるものではありません。
- 3) この信仰告白では、救いについてさまざまな言い方をしています。例えば、救いはしばしば"信仰による義認"と表現されます。私たちの救いと"みなされる"義認(ローマ 4:1-12) は、神との契約関係として経験されるものです。契約とは二者の間で必ず守らねばならない合意のことです。神はその関係を申し出ておられます。正しい人、すなわち義人は、その申し出を受け入れて、契約に従って生き、神の御真実に信頼します。信仰による義認と契約関係の忠実な遵守とは切り離すことができません(ヘブル11章)。"弟子の道とキリスト者の生き方"(第17条)を参照してください。

"新生"は、救いを表現するもう一つの方法です。人は、神のかたちに造られました。すなわち、神の子供でした。彼らが罪を犯したとき、悪魔の子となって神の家族の中での居場所を失いました(Iョハネ2:29-3:10)。私たちは救いを通して"再び生まれ直す"か、養子とされて神の家族に入れられます(ガラテヤ3:23-4:7)。

新約聖書は、しばしば、私たちの救いを平和と結びつけます(ヨハネ 16:33、ローマ 5:1、10:5)。そうすることで、救いがシャロームという旧約聖書の概念の上に立ちます。キリストの十字架上の死によって、私たちは神との平和を得ているだけではなく、教会内においてかつては敵対していたグループ間の和解も得ています(エペソ 2:14-17)。復讐することなく苦しみを受けるキリストが、私たちの模範です。私たちは、キリストの御跡に従い、義のために生きることができます(Iペテロ 2:19-24、ルカ 6:35-36、マルコ 8:34)。"平和、正義、無抵抗"(第 22 条)を参照してください。

4) 神は、共同体の中で個人として私たちを救ってくださいます。主の救いの御業は、束縛されている民全体を包含しています (出エジプト15章)。イエスは弟子の一団を召し出されました。教会が救いのメッセージの背景をなしています(エペソ2:11-22、Iペテロ2:1-10)。そこでは、証人の前で契約がなされ、教会員は責任を持たされます。神が私たちと結ぶ契約はまた、神の民の中に正しい関係をもたらし、かつての敵意は和解をみます。

5) 聖書によると、救いは、私たちがこれまで犯した罪の救いだけではなく、これまで私たちが陥っていた悪の力からの救出(Iペテロ 2:24、マタイ 26:28、ヘブル 2:14–15)や、私たちに対して罪を犯した敵からの解放(ルカ 21:16–19、使徒 4章)、それに癒しも含んでいます。なお、救いと癒しの関係を話し合うためには、"宣教する教会"(第 10 条)の解説 3)を参照してください。私たちの最終的な救いは、復活の力にあります。

第9条 イエス・キリストの教会

私たちは、教会とはイエス・キリストを信じる信仰を通して、神が与えてくださる救いを受け入れた者の集まりであると信じます。教会は、神の統治を宣言し、教会の持つ輝かしい希望を事前に体験するために、この世に遣わされた弟子から成る新しい共同体です。教会は、聖霊によって確立され、維持される新しい社会です。キリストのからだである教会は、礼拝、奉仕、証し、互いの愛といたわり、教会生活全般の秩序において、そのかしらであるイエス・キリストにますます似るものとなるように召されています¹)。

私たちは、教会が、証しをするため聖霊によって油注がれた、多くの国の信じる者から成る社会であると認めます²⁾。聖霊の御業により、教会においてあらゆるグループからの人が和解し、一つとされるとき、国家、人種、階級、性別の間にある分裂は癒されていきます³⁾。平穏な時だけではなく苦難の時も、教会は、その維持と使命のために、政府の権力や善政に頼るのではなく、聖霊の臨在と御力に頼ります。

教会は、キリストに従って生き、神とお互いとに対して責任を負うことを自ら 進んで決心した者の集まりであり、同時に、教会が完全なものではなく、そのた め絶えず悔い改めを必要としていることを認める者の集まりです。教会員が定期 的に礼拝に集うとき、信仰による神の民としての教会の独自性が保たれ、新たに されます。この礼拝において、教会は神の限りない恵みをほめたたえ、なにより も再度神への忠誠を明言し、神の御心を確かめるように努めます。

教会は神の家、すなわち神の家族です⁴⁾。互いにかかわり合う姿勢は、神が愛してくださるように互いを愛し、物質的、霊的資産を分かち合い、互いに思いやり、かつ戒め合い、すべての人をもてなすことに表されます⁵⁾。教会は、神の家族の一員になるためキリストに身を委ねる人すべてを喜んで迎え入れます⁶⁾。

私たちは、キリストのからだとしての教会が、イエス・キリストの目に見える 姿であると信じます。キリストがこの世で生き、仕えたのと同じように、教会は、 この世で生き、仕えるように召されています。多くの器官が一つのからだに属し ているように、信じる者は、すべて一つの御霊によって洗礼 (バプテスマ) を受け、キリストのからだと一つにされました。教会にはさまざまな賜物と奉仕があり、それらのすべてが全体の益となるために与えられています。信じる者は、互いに愛し合い、教会のかしらであるキリストに似るように成長していきます。

教会は、個々の群れにおける信じる者の共同体として、また、それらの群れから成る共同体として、さらには、全世界の信仰共同体として存在しています。

- 1) エペソ4:13、15
- 2) 使徒1:8、2:1-11
- 3) 使徒11:1-18、 I コリント12:12-13、ガラテヤ3:26-28
- 4) マルコ3:33-35、エペソ2:19
- 5) 申命記 10:19、ローマ 12:13、ヘブル 13:2
- 6) ヨハネ20:21、マタイ28:18-20、マタイ5章-7章

解説

- 1)新約聖書では、教会を神の民と呼んでいる(Iペテロ2:10)ことから、初期の教会が自分たちを知るために、多くのことを旧約聖書に頼っていたことが分かります(出エジプト7:6、IIサムエル7:24)。旧約時代の民と同じように、新約時代における神の民も、自分たちを契約の共同体とみなし、揺るがぬ愛と支えつづけるあわれみを約束される神を頼りとします。彼らは"選ばれた種族、聖なる国民、神の所有とされた民"です(Iペテロ2:9、さらに出エジプト19:6も参照)。教会という言葉は、ほとんどの場合、ヘブル語のカーハール(qahal)、あるいはギリシャ語のエクレーシア(ekklesia)の訳語であり、"集会"を意味します。しかし、教会は新しい種類の集会です。その帰属意識は、生まれつき共通の遺産に根ざすのでも、地理的な場所に結びつけられるのでもありません。教会は、多くの国や民族的背景の人たちで構成されています。このように、教会は、新しい社会であり、新しい政治実体であって、この第9条では"社会"、"集まり"、"神の家族"、"弟子の共同体"と言われています。
- 2) メノナイトが自発的加入による教会員ということを強調するため、人間の能力を重く見る現代の風潮と相まって、私たちは、教会を単なる人間の努力の産物と見たくなる誘惑に陥るかもしれません。しかし、教会は、人間のつくる組織以上のものです。教会は、ほかならぬその存在といのちを神に依存しています(エペソ3:20-21)。その土台はイエス・キリストです(Iコリント3:11)。教会は、い

つも変わらず、聖霊に依り頼みます。

- 3) アナバプテストの好む教会像の一つが"キリストのからだ"でした。教会生活に加わるというのは、キリストに身を投じるということです。キリストに従って生きながら、洗礼(バプテスマ)の契約や共同体への忠誠に誠実に応えるのは、キリストを知る一つの道です。愛の働きと奉仕は、キリストのからだである教会の中でなされ、かつ教会を通してなされるキリストの御業の延長です。定期的に合同の礼拝に加わり(ヘブル10:25)、共に主の晩餐に与かるのは、キリストのいのちに参与する道であり、互いに励まし合う道であります。
- 4) 教会に関しては、このあとの箇条でより詳しく述べています。宣教(第 10 条)、洗礼、主の晩餐、洗足の実践(第 11 条 13 条)、戒規、奉仕の務め、秩序と一致(第 14 条 16 条)。そのあとの箇条(第 17 条 第 24 条)では、この世における教会、および教会と神の統治との関係について述べています。

第10条 宣教する教会

私たちは、教会が神の国を宣べ伝え、そのしるしとなるように召されていると信じます。キリストは、教会がキリストの証人となり、すべての国の人々を弟子とし、彼らに洗礼を授け、命じておいたすべての事を守るようにと教えることを委任されました¹⁾。

イエスは、説き、教え、癒す働きをなさるに際して、このように言われました。「神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい²⁾。」死とよみがえりの後、イエスは弟子たちに委任して言われました。「平安(平和)があなた方にあるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなた方を遣わします。・・・聖霊を受けなさい³⁾。」その御霊によって力を与えられ、私たちは、イエスの働きを継続し、キリストを主であり救い主であると認める新しい神の民を集めます。

教会は、自らの生き方においてキリストのいのちを具現化し、神の統治に合わせて自らを形づくることにより、キリストの支配を証しするように召されています。こうして、教会は、キリストの主権の下にある生活の実例をこの世に示します。教会は、その生活によって山の上の町、諸国への光となり⁴⁾、周囲の社会とは異なる生き方によって、よみがえりの力を証しします。

教会はまた、言葉と行いとにより神の統治を宣べ伝えることにおいても証しを します。教会は、失われた人を探し、悔い改めを求め、罪からの解放を宣言し、 抑圧されている人を解放し、公正と正義のために祈り、イエスがなさったように 仕え、強いることなく、すべての人々に神の民の一人となるように勧めます。教会は、塗油によってもなされる、神の癒しの場となるように召されています⁵⁾。たとえ苦難と死の危険があっても、キリストの愛に迫られて、忠実な証人はその救い主について証言します⁶⁾。

そのような証しは、弟子をつくるようにというイエスの呼びかけに対する応答です。新しい信徒は、教会に温かく迎え入れられると、教会における礼拝、教会における交わり、教育、助け合い、意思決定、奉仕、継続的な宣教の使命に参加するようになります⁷⁾。新しい信徒はまた、教会がその宣教の使命にある新しい広がりを知るための助けもします⁸⁾。

神は、すべての国と民族的背景を持つ人々に向けて宣教することを、教会に呼びかけておられます。イエスは弟子たちに、"エルサレムで、ユダヤとサマリヤの全土で、そして地の果てに至るまで"、御自分の証人となる働きを委ねられました⁹⁾。使徒パウロは異邦人の国々に福音を伝えました。今日、教会もまた、あらゆる文化、民族、国籍の人々に証しするように召されています。教会の宣教の使命には、いかなる国家や帝国の保護も必要としません。すべての文化の中で、キリスト者は寄留者であり、在留外国人です。しかし、教会自体は神の民であり、あらゆる国と民族の出身者を包含しています。まさに教会の宣教の使命は、意見の異なる人たちを和解させ、新しいひとりの人間をつくり¹⁰⁾、やがて主の山にすべの国の人々が流れるように集まって平和に過ごす日の様子を、あらかじめ見せることにあります¹¹⁾。

- 1) 使徒1:8、マタイ28:19-20
- 2) マルコ1:15
- 3) ヨハネ 20:21-22、使徒 10:36
- 4) マタイ 5:13-16、イザヤ 42:6
- 5) マルコ 6:13、ヤコブ 5:14-15
- 6) Ⅱコリント5:14
- 7) 使徒2:41-47
- 8) 使徒10章、15章
- 9) 使徒1:8
- 10) エペソ2:15-16
- 11) イザヤ2:2-4

解説

- 1) キリストは御自身の宣教活動の継続を教会に委託されました。福音宣教の賜物を持つ宣教師やほかの人たちは、それぞれ独立して働くのではなく、キリストと教会の代理人として務めを果たします。イエスによって弟子たちに託された務めは、(マタイ 28:19-20、マルコ 16:15-18、ルカ 24:45-49、ヨハネ 20:21-22、使徒1:8に記されているように、) 使徒を通して共同体全体に与えられています。
- 2) 教会の宣教の使命には、言葉も行いも、福音宣教も奉仕も含んでおり、キリストのメッセージを宣べ伝えることも、キリストにある新しい創造の本質を教会の生活によって実証することも含んでいます。宣教の使命を果たすためには、言葉だけでも、行いだけでも十分ではありません。言葉が行いを説明し、行いが言葉を証明します。
- 3) イエスがなさった働きでは、(からだと霊の) 癒しと救いとが密接に関係しています。新約聖書では、癒しと救いとに同じギリシャ語が使われています。罪が赦された人に対しても、癒された人に対しても、イエスのお言葉は、"あなたの信仰があなたを救った[あなたを癒した]。安心して行きなさい。"でした。(これについては、ルカ7:50と8:48を比較してください。そこでは同じギリシャ語が使われていますが、NIVとNRSVとでは使われている英語が異なります。)教会は祈りと塗油による奉仕を通して、癒しのための場となることもあります。
- 4) 宣教の使命には平和と福音宣教が含まれます。平和は、教会のメッセージの内容に不可欠な部分です(使徒 10:36、エペソ 2:17、6:15)。平和はまた、福音宣教との関連も表しています(ヨハネ 20:21-22)。福音の力は非常に強く、神のあわれみは非常に広範囲にわたるため、どのような人でも悔い改めて救われます。どんな敵でも神の愛が及ばぬほど悪くはありません。教会は大胆に和解に生き、和解を説きますが、けっして強いることはしません。宣教する教会は、力ずくでそのやり方を通すくらいなら、苦しみを受けるほうを選びます。新約聖書の原語では"証人"と"殉教者"とは同じ単語です。
- 5) 教会は、取り巻く社会の中でもう一つ別の文化を持つものとして生きるように召されています。そのため、教会は、文化の多数派に属する人々に宣教するにしても、文化の少数派に属する人々に宣教するにしても、あるいは他の国々のさまざまな文化集団に宣教するにしても、異文化への宣教に深く関わります。教会

は支配的な文化の中で生きていますが、その文化的神話や仮説がキリスト教信仰と対立するときは、それらに異議を唱えるように召されています。これらの文化的神話の中には、個人主義、物質主義、軍国主義、国家主義、人種差別、性差別、それと五感や理性を超えるいかなる現実をも否定する世界観などがあります。

6)教会は、その宣教の使命において、イエス・キリストを世界の唯一の救い主として主張します(使徒 4:12)。人々の中には、神に至る道はどれも同じように根拠があって、宣教活動というのは、その性質上、相手の意見に耳を傾けない強圧的なものだと感じている人もいます。しかし、キリストを忠実に証しするというのは決して強圧的なものではなく、私たちの見方をだれかに無理やり押しつけるということでもありません。それは、神がどこにおいても必ず証しされる存在であることを認めるものです(使徒 10:35、14:17、17:22-31、ローマ 1:19-20、2:14-16)。キリストを忠実に証しするのは、私たちの生活における神のお働きを証言することであり、キリストを知り、キリストに従い、キリストのからだの一部となるようにと他の人々を招くことであります。私たちは宣教の使命に励みますが、それは人々に対する私たちの愛と関心のゆえであり、キリストの愛が私たちを駆り立てるからです。私たちはまた次のようにも理解します。ちょうど初期の教会による異邦人伝道が、いくつかの新しい点で福音理解に役立ったように、宣教の使命は、私たちの福音理解が深まるのを助ける、と。

第11条 洗礼 (バプテスマ)

私たちは、信じる者が水で受ける洗礼 (バプテスマ) は、罪から清めのしるしであると信じます。洗礼 (バプテスマ) はまた、聖霊の力によってイエス・キリストの道を歩むという契約を、教会の前でする公約でもあります。信じる者は、御霊と水と血によって、キリストとそのからだの中に浸されます。

洗礼 (バプテスマ) は、神が聖霊の賜物をくださり、信じる者の生活に御霊が絶えず働いている証しです。私たちは、御霊によって悔い改め、信じて神に立ち返ります。御霊による洗礼 (バプテスマ) によって、信じる者は、新しい人生を歩み、キリストと教会と共に共同体の中で生き、必要な人にキリストの癒しと赦しを与え、キリストの福音を大胆に証しし、キリストの将来の栄光に与る希望を持つことができます。

水による洗礼(バプテスマ)は、キリスト・イエスにある神の恵みによって、 人が悔い改め、赦しを受け、悪を捨て去り、罪に対して死んだことのしるしです $^{1)}$ 。このように清められてから、信じる者は、地上においてキリストのからだで ある教会に加えられます。水による洗礼 (バプテスマ) はまた、キリストに仕え、それぞれに与えられた賜物に従ってキリストのからだの一部として奉仕することを公約するものでもあります。イエス御自身が宣教活動の初めに水による洗礼 (バプテスマ) をお求めになり、"すべての民を弟子とし、父と子と聖霊の名によって洗礼 (バプテスマ) を授けるために、" 御自分の弟子たちを遣わされました²⁾。洗礼 (バプテスマ) は、イエスの御命令を遵守して行われるとともに、水によるイエスの洗礼 (バプテスマ) においてだけではなく、御霊によるイエスの生涯と苦難を受ける愛の死においても、イエス・キリストと一体となる決意を公にするものとして行われます。

血による洗礼(バプテスマ)、すなわち苦難の洗礼(バプテスマ)は、死に至るまでも自分のいのちをささげることであります。イエスは、他の人のために御自分の血を流していのちを与えることが洗礼(バプテスマ)であると理解しておられました³⁾。イエスはまた、弟子たちの受ける苦難と死が洗礼(バプテスマ)であるとも話されました⁴⁾。水による洗礼(バプテスマ)を受ける者は、たとえそれが自分自身の苦難と死を意味するとしても、他の人のために自分のいのちを与え、自分の敵を愛し、暴力を放棄してイエスに従う決意をします。

キリスト教の洗礼(バプテスマ)は、自分の罪を告白し、悔い改め、イエス・キリストを救い主また主として受け入れ、キリストのからだの一部として教会において思いやりと助言を与えたり受けたりしながら、キリストに従順に従う決意をする者のためのものです。 洗礼(バプテスマ)は、責任を持てる年齢にある者で、信仰じてイエス・キリストに応答することにより、自ら進んで洗礼(バプテスマ)を願い出る者のためにあります。

- 1) ローマ6:1-4、使徒2:38-39
- 2) マタイ 28:19
- 3) ルカ 12:50、 I ヨハネ 5:7-8
- 4) マルコ 10:38
- 5) マタイ 28:19-20、ヨハネ 4:1、使徒 2:38、ガラテヤ 3:27

解説

1)洗礼(バプテスマ)と主の晩餐を、象徴またはサクラメント、あるいは聖礼 典という教会もあります。この信仰告白では、これらの儀式を、意味の広い聖書 用語を用いて、しるし(signs)と呼びます。しるしは、何よりもまず、神の行為 であります。エジプトにおけるしるしと不思議な業(出エジプト 10:1、民数記 14:11)、預言者へのしるし (イザヤ7:14、55:13)、イエスのしるしの御業 (ヨハネ2:11、12:37、20:30) などがそうです。ヨハネ2:18-22では、イエスの死とよみがえりをしるしとして見ています。しるしは神の行為であるだけではなく、人間の行為でもあります。過越には種を入れないパンを食べること (出エジプト13:6)、戒めを自分のからだに結び付けておくこと (申命記6:8)、安息日を守ること (出エジプト31:13、エゼキエル20:20) などです。同様に、洗礼 (バプテスマ)もしるしであり、私たちを罪と死から救い出す神の行為を象徴しているとともに、洗礼 (バプテスマ)を受ける者の行為、またキリストのからだである教会とのかかわりの中で、イエス・キリストに従うことを神に約束する者の行為を象徴しています。

- 2) I ヨハネ 5:7-8 では、洗礼 (バプテスマ) に見られる三つの面、すなわち御霊と水と血とを同一視しています。この聖句は、まずイエスの洗礼 (バプテスマ) に言及しています。しかし、新約聖書では、信じる者はイエスと一体になるとも述べています。
- ・聖霊による洗礼(バプテスマ): 新約聖書によると、水による洗礼(バプテスマ)と聖霊による洗礼(バプテスマ)とは、いつも同じ方法ではないにしても、両者は緊密に結びついています。イエスが洗礼(バプテスマ)を受けられたとき、聖霊がイエスの上に留まりました(ヨハネ 1:33)。使徒行伝では、信じた者は水による洗礼(バプテスマ)の前か、洗礼(バプテスマ)の時か、洗礼(バプテスマ)の後のいずれかに聖霊を受けました。
- ・水による洗礼(バプテスマ): 洗礼(バプテスマ)は、病気や罪、あるいは他の原因によって汚れたものを儀式として洗うという、旧約聖書における慣習にそのルーツがあります(レビ 14:1-9、16:24-30、17:15-16)。異邦人は、改宗を表明する洗礼(バプテスマ)によって契約の民に加えられました。キリスト者の水による洗礼(バプテスマ)は、その人を罪から清め、新しい信仰共同体に加えることを意味します。教会は滴礼、浸礼、あるいは潅水礼によって洗礼(バプテスマ)を施すことができます(ローマ6:3-4、コロサイ2:12、使徒2:17、テトス3:5-7)。聖書はまた、洗礼(バプテスマ)を神に対する約束とし(Iペテロ 3:21)、さらに信義と奉仕への献身として述べています(ローマ6:1-11)。イエスの洗礼(バプテスマ)は、この約束に照らして見ることができます。新約聖書では、人が信仰を持ってから洗礼(バプテスマ)が行われます。したがって、洗礼(バプテスマ)はキリストと教会とに対する信頼関係に入る決心がついている人のために行われるものです。

そういうわけで、洗礼 (バプテスマ) はいつも教会およびその代表者によって、できれば会衆の前で行なわれるべきです。それは公のことであるべきです。なぜなら、洗礼 (バプテスマ) は、特定の群れの一員になって奉仕をするという献身を意味するからです。したがって、水による洗礼はそのような約束ができる年齢に達した者にだけ授けられます。幼児や児童は洗礼 (バプテスマ) を受ける必要がありません。これらの子どもたちは神の御配慮のうちに安全に守られているからです。この子どもたちは、自分自身の行為に責任を持つことができるようになれば、教会の信仰を自分自身の信仰とすることができます。

・血による洗礼 (バプテスマ): 水による洗礼 (バプテスマ) は、信じる者が苦難と死の洗礼 (バプテスマ) を受け入れるという約束でもあります。水による洗礼 (バプテスマ) は、キリストの十字架の道とよみがえりによって、私たちをキリストと一体にします (ローマ 6:5-11)。私たちは、"死に至る洗礼 (バプテスマ)によってキリストと共に葬られます。それは、キリストが父なる神の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちもまた、新しいいのちに歩むためです (ローマ 6:3-4)"。

第12条 主の晩餐

私たちは、主の晩餐とは、イエスがその死によって聖定された新しい契約を、教会が感謝して思い起こすしるしであると信じます。共に与るこの食事において、教会員は、神との契約および互いに交わした契約を新たにします。私たちは一つの体として、人類の贖いのために与えられたイエス・キリストのいのちに与ります。このようにして、私たちは、キリストが来られるときまで、主の死を告げ知らせます¹)。

主の晩餐は、イエス・キリストを指し示しています。イエス・キリストのからだは、私たちのために与えられ、その血は新しい契約を聖定しました²⁾。パンと杯を分かち合うとき、信じる者一人ひとりが、イエスの死とイエスを死者の中からよみがえらせた神の救いの御業を思い起こします。私たちは食事を共にしてこの出来事を同じように体験しながら、過去と現在における神のすべての救いの御業と、罪の赦しと、私たちの生活における神の絶えざる恵みに感謝します。

主の晩餐は、よみがえられたキリストの臨在を、教会において再現するものです。私たちがパンと杯による聖餐に与るとき、信じる者から成る体は、キリストのからだと血を共に分かち合い³⁾、体のいのちが、いのちのパンであるキリストによって養われていることを改めて認識します。

イエスがどのようにして御自分のいのちを友のために捨ててくださったかを思

い起こすとき、主に従う私たちは、十字架の道を歩む決意を新たにします。私たちは互いに罪を言い表し、赦しを受けることにより、一つの体として主の食卓に着きます。そのところで、私たちは、神と取り交わし、互いに取り交わした洗礼の契約を新たにし、あらゆる時代のあらゆるところで、すべての信じる者と私たちとが一体であることを認めます。

すでに洗礼を受けて信仰共同体に加えられ、現在、神および信仰による兄弟姉妹と平和に過ごしており、自分の属する教会において責任を負う意志のある者はすべて、主の食卓に招かれています。

このように主の晩餐を祝いながら、教会は喜びと希望を持って、来るべき時に、 贖われた者がキリストと共にする祝宴を待ち望みます⁴⁾。

- 1) Iコリント11:26
- 2) エレミヤ31:31-34、Iコリント11:24-25
- 3) Iコリント10:16
- 4) ルカ 22:15-20、28-30

解説

- 1) イエスは裏切られた夜、御自分の弟子たちと過越しの食事をするために集まりました。年に一度のこの祝いは、エジプトにおける奴隷の状態からイスラエルの民を救い出した、神の偉大な御業を思い起こさせました(出エジプト12章)。イエスがなさった最後の晩餐は、新たなるエクソダス(エジプト脱出)によって、御自分に従う者を束縛から解放して救いへ導こうとする合図でした。神は、イエスの死とよみがえりを通して、信じる者を罪と悪から救い出し、新しい契約に入らせました。この契約によって生まれた神の新しい民は、神がエジプトの束縛から救い出した旧い契約の民に連なっています。新しい契約の人々には、イエス・キリストを主であり、救い主であると告白したすべての人が含まれます。
- 2) 主の晩餐のパンはキリストのからだのしるしであり、杯はキリストの血による新しい契約のしるしです (ルカ 22:19-20)。キリスト者がパンを食し、杯を飲むとき、自分たちの真ん中にキリストが臨在されるのを経験します。主の晩餐は、キリストを象徴するものでもあるし、信じる者から成る体に、キリストが再び臨在しておられるのを示す方法でもあります。この食事によって、教会は、この世におけるキリストのからだとなるため、また他の人々のためにキリストのいのちを生きるために、その契約を新たにします。

聖餐は、信じる者が教会として互いに一つであることのしるしです(I コリント 10:17)。枝がぶどうの木の一部であるのと同じように、信じる者はキリストにあって互いに結び合わされているものです。信じる者は、自分たちの中に分派をつくることなく、ふさわしいあり方で主の食卓に着くことになります(I コリント 11:17-22、27-34)。教会は、和解を促す道を見い出し、分かち合いに備えて教会員を整えるように勧められています。信じる者が互いに交わす契約には、兄弟姉妹を愛する約束、互いに責任を負い合う約束、罪の告白と赦しの約束、必要なときに物的、霊的資源を分かち合う約束が含まれます。教会がグローバルな一体性を認めるとき、このような愛と分かち合いは、世界中に行き渡ります。

主の晩餐におけるこの喜ばしい、しかも厳粛な交わりは、やがてすべての信じる者が神の統治の下にキリストと祝宴を共にするときに味わう、より完全な喜びを事前に味わうものです(黙示 19.9、参照:イザヤ 25:6-8)。

- 3) 主の晩餐は、洗礼と同様に一つのしるしであり、罪と死から私たちを救い出すことによって、神の御業と、契約を守られる神の誠実さとを象徴しているとともに、神との契約を誠実に守る決意を新たにする者の行為を象徴しています。イエスを通してなされる神の救いに対する教会の応答には、感謝に溢れる思いが含まれているので、主の晩餐は、時には、"ユーカリスト"と呼ばれます。これは"感謝すること"を意味します。さらに、主の晩餐は、イエスが弟子の共同体を招き、同じ食卓を囲んで、御自分との交わりと弟子同士の交わりのうちにパンと杯を分かち合った出来事を象徴しているところから、時には、"コミューニオン(分かち合い)"と呼ばれます。
- 4) 初代教会では、主の晩餐を頻繁に祝うのが慣例で、それは主の日ごとに、あるいは毎日でも行なわれました(使徒2:46)。16世紀のアナバプテストも、自分たちが神と互いとに交わした契約を新たにするしるしとして、しばしば主の晩餐を共にしました。私たちの教会は、これをたびたび祝うように勧められています。それは、教会の礼拝といのちのためにある、主の晩餐の豊かな意義に与るためです。

第13条 洗足

私たちは、イエス・キリストが御自分のなさったように愛をもって互いに仕え 合うように私たちを召しておられると信じます。私たちは、他の人のうえに立と うとするのではなく、弟子の足を洗うことによってしもべの役目を選ばれた、主 の模範に従うように召されています。

イエスは、死の直前、身をかがめて弟子の足を洗って言われました。「それで、あなた方の主であり師であるわたしがあなた方の足を洗ったのであれば、あなた方も互いに足を洗い合うべきです。なぜなら、わたしがあなた方にした通りにあなた方もするように、わたしはあなた方に模範を示したからです¹¹。」このようになさって、イエスは、へりくだりとしもべの道を示し、さらに、愛する者のために御自分のいのちさえもお捨てになりました。弟子の足を洗うことによって、イエスは、弟子のために死ぬその生き方と、弟子たちがこの世に召されて生きる道とを、範例として行動で示されました。

信じる者は、互いに足を洗うことによって、キリストのからだを共有していることを示します²⁾。このようにして、信じる者は、いつでも繰り返して清められる必要があることを認め、進んで自尊心や世俗の権力を捨て去る思いを新たにし、謙虚な奉仕と犠牲的な愛によって自分のいのちを捧げます³。

- 1) ヨハネ 13:14-15
- 2) ヨハネ 13:8
- 3) マタイ 20:20-28、マルコ 9:30-37、ルカ 22:25-27

解説

- 1) 足を洗うことは1世紀のパレスチナではありふれたことで、人々は土ほこりの道を歩くのにサンダルを履いていました。普通、人々は自分で自分の足を洗います。時には、特別の献身的な行為として、弟子が師の足を洗うこともあったことでしょう(参照:ヨハネ 12:1-8)。しかし、主であり師であるイエスが、弟子たちの足を洗うことなど誰も予想していなかったと思われます。
- 2) ヨハネ 13:1-30 は、イエスが弟子たちの足を洗ったことを詳しく記しています。この行為の後に解説が続いており(ヨハネ 13:31-17:26)、イエスがこの世にいる御自分の弟子たちを最後まで愛され、しかも御自分を裏切り、あるいは否定するであろう者までも愛されたことには、どのような意味があるのかを説明しています。イエスの愛は、そのような者たちのために御自分のいのちを捨てるほどまで徹底していました(ヨハネ 15:13)。イエスは、"父が万物を彼の手に渡された(ヨハネ 13:3)"にもかかわらず、その力を行使する特権を留保なさり、しもべの道を通じて来る真の力を示されました。"彼は自分を卑しくし、死に至るまで、それも十字架上の死に至るまで従順であられた。それゆえ、神は、彼をきわめて

高く上げられた(ピリピ2:8-9)。"とあるとおりです。

それと同じように、イエスに従う者は、他の人をより完全に愛するために、しかも、愛するのがつらく思える人に対してもより完全に愛するために、名誉と誇りを捨て去るように求められています。イエスに従う者は、このような愛の生き方によって、自分が清められており、キリストの一部であることを表します(ヨハネ 13:8-10)。互いの足を洗い合うのは、力強く、謙虚に奉仕してイエスの後に続くという、この献身を表現する一つの方法です。

3) 私たちの教会の中には、現在洗足を実施している教会がある一方で、すでに中止してしまったか、一度も実施したことのない教会もあります。洗足がお互いのための奉仕と愛の象徴として有意義なときには、教会は洗足を実施するように勧められています。"聖徒の足を洗うこと(Iテモテ 5:10)"は、もてなしと奉仕と愛の行為において、互いにキリストを表していく一つの方法です。

第14条 教会における戒規

私たちは、教会における戒規が、忠実な弟子の道から離れつつある信徒、あるいは罪に陥った信徒に対して、神のくださる赦しと一新させる恵みのしるしであると信じます。戒規は、過ちを犯した兄弟姉妹を罪から解放し、彼らが神との正しい関係に立ち戻ることができるようにし、教会における交わりを回復させようとするものです。戒規はまた、教会の証しを高潔にし、この世における福音のメッセージの信頼性にも寄与します。

イエス・キリストと使徒たちの教えに従って、すべての信徒は各自ふさわしく、教会における互いへ配慮と戒規にかかわります。イエスは、善と悪とを見分け、悔い改めがあれば罪を赦し、悔い改めがなければ罪を保留にしておく権威を、教会にお与えになりました¹⁾。したがって、信じる者は、教会の一員になるとき、教義と行いの重要な問題について信仰共同体の中で助言を与えたり、受けたりすることを約束します。

お互いの励ましや牧会的配慮、戒規によって、普通は、告白、赦し、和解へと 導かれます。教会における矯正的な戒規は、贖いを表す仕方で行われるべきです。 基本的な形 (パターン) としては、まず、過ちを犯した者ともう一人の教会員と の直接的な対話によって、"愛をもって真実を語ること"から始めます²⁾。その者 の対応次第では、より輪を広げたグループ中での忠告が続くかもしれません。通 常、この中には牧師または教会の指導者が加わります。必要が生じれば、問題は 最終的に教会に持ち出されます。悔い改めた兄弟または姉妹は赦しを受け、改め るべきところを改めるように励まされます。

もし、罪を犯した教会員が悔い改めることなくいつまでも罪のままでいて、教会の忠告も拒むならば、教会員の資格が一時停止されることもあります。教会員資格の一時停止は、人が自分自身をキリストのからだから切り離してしまったと認めることです³)。このような事態が起きれば、教会はその人のために祈りを続け、その人を教会の交わりに戻そうと努めます⁴)。

私たちは、戒規が正しく理解されて実践されるならば、言葉と行いによる教会の証しの一貫性を支えると認めます。キリスト者の中に、いつまでも正されない間違った教えや罪深い行いがあれば、この世における福音宣教と福音の信頼性を損ないます⁵⁾。戒規は、赦しと一新させる恵みのしるしとして、聖霊の力によってなされる、赦しとキリストにある新しい生き方のメッセージの例証になります。戒規は、良い教えを強固にし、道徳的行いを持続させる手段として、理解と実践の面で信義を築くのを助けます。

- 1) マタイ 18:15-22、ヨハネ 20:21-23、ガラテヤ 6:1-2、申命記 19:15
- 2) エペソ4:15、マタイ18:15、
- 3) Iコリント5:3-5
- 4) Ⅱコリント2:5-11
- 5) マタイ 5:14-18、ローマ 2:21ff.

解説

1)16世紀のヨーロッパにおけるアナバプテストとメノナイトは、牧会的配慮と教会の健全さのためには戒規が不可欠だと見なしました。実際、彼らは信じる者が洗礼(バプテスマ)や主の晩餐への参加を重視するのと同じように、教会の再生のためには戒規が重要であるとみなしました。

メノナイトは伝統的に教会戒規を強調して来ました。ヨーロッパの多くの教会で、戒規が時には軽視されたことがありました。その理由は、一部には誤って用いられた面があったこと、また一部には文化的、社会的な影響のあったことです。

戒規を誤用しても軽視しても、教会のいのちと証しを弱いものにします。誤用と軽視の両面によって、牧会的配慮や養成および教会生活における教会戒規の矯正、再生、贖いという重要な目的が妨げられます。

2) 教会の伝統によっては、教会戒規に対する責任が、牧師や監督といった特定の牧会職に限定されてしまったものもあります。メノナイトの見地から見ると、

戒規はまず、教会員がお互いに配慮し合うことに関係しています。キリストの教えに従って(マタイ 18:15-18)、すべての教会員が、それぞれ互いに、相互の励まし合い、正し合い、赦し合いの申し出をします。そういうわけで、教会員として受け入れられるとき、助言を与えたり受けたりするという約束を含めているのは正しいことなのです。

牧師および他の教会指導者には、教会生活において、導きをなし、戒規を実行する特別の責任があります(使徒20:28-31、テトス1:5-11、Iペテロ5:1-4、ヘブル13:17)。これらの者は、愛をもって、柔和な心で、分け隔てなく責任を果たします。

3)牧師および他の教会指導者であっても、忠実な弟子の道からはずれているか、 罪に捕らえられている者は、教会における戒規を免れられません。これらの者は 代表者の職務にあるため、その教えや行いが、この世において、教会員および教 会の証しにとって大きな助けにも、大きな損傷にもなり得ます。したがって、こ れらの人は、奉仕する教会とより広い教会に対して責任があります。

牧師や教師および他の教会指導者は、時々、うわさ話や不当な非難の犠牲になることがあるかもしれません。そこで言われている内容を注意深く検証してみるべきです(Iテモテ 5:19)。なぜなら、教会指導者の失敗によって、教会のいのちと証しが損なわれるだけではなく、いわれのない非難によって指導者と教会が傷つくからです。

- 4) 新約聖書は、交わりを一時停止すること、あるいは破門することの理由をいくつか述べています。それには、イエス・キリストが肉のからだで来られたのを否定すること、悔い改めもせずいつまでも罪にまみれた行いを続けていること、使徒の教えに反対して教会に分裂を引き起こすこと、などが挙げられています(例えば、 I ヨハネ 4:1-6、 I コリント 5:1-13、ローマ 16:17-18)。
- 5) 教会戒規については、さらに "弟子の道とキリスト者の生活" (第17条) と "キリスト者の霊性" (第18条) を参照してください。

第15条 奉仕の務めと指導者

私たちは、奉仕の務めはキリストの御業の継続であると信じます。キリストは、 聖霊によって信ずる者すべてにさまざまな賜物を与え、教会とこの世において奉 仕ができる力を授けてくださいます。私たちはまた、神は教会の中で特定の者た ちを召して、指定した指導者の務めやさまざまな職務につかせると信じます。奉 仕の務めをする者はすべて、教会に仕えるときは、神と信仰の共同体に対して責 任を負っています。

キリストは、教会の中で、および教会に代わって教会の外で互いに仕え合うため、すべてのキリスト者を招いておられます¹⁾。キリストは、すべてのキリスト者が具体的な必要や機会に応じて奉仕の務めが出来るようにしてくださいます²⁾。このような奉仕は、この世において、愛によってキリストのからだを造り上げ、神の義を証しする、神の創造の御業に参加することです³⁾。

教会は、自らのために、賜物を与えられた男女をさまざまな指導者の務めに呼び集め、訓練し、任命します。これらの中には、伝道者、宣教師、教師、奉仕者のための牧会者、管理者のほかに牧師、執事、長老などの務めを含むこともあります⁴⁾。指導者の品性と評判は、非難されるところのないものであるべきです。任命された者は、キリストを模範としながら、教会が"霊的に共に建て上げられて神の住まいになる"ため、権威をもって説教し、教え、熱心に聖書と信仰について解き明かし、大胆に神の真理を語り、聖徒たちを整え、深い憐れみをもって貧しい人々にかかわり、忠実な信仰生活を営む群れを導きます⁵⁾。

特定の務めに対する召命の確認は、教会と教会に選ばれた代表者との間における相互の責任を示すしるしです。一定の任用確認期間を経た後、按手による任職式(叙任)、またはそれに類する行為が行われることもあります⁶⁾。この行為は、御言葉に仕える者として、その者の責任を象徴します。教会および教会の群れ、または協議会は、祝福と支持のあらわれとして、また、神および教会の前におけるその者の説明責任と、その者に対する教会の応答責任の覚えとして、この行為に共に与ります。

- 1) マタイ 25:31-40、 I コリント 12:31-13:13
- 2) エペソ4:7、ローマ12:4-6、Iペテロ4:10-11
- 3) エペソ4:15-16、ルカ10:1-37
- 4) エペソ4:11-13、 I コリント12:28、ローマ12:6-8、 I テモテ3:1-13、テトス1:5-9
- 5) ローマ 10:14-15、マタイ 7:29、テトス 2:15、 I テモテ 4:13、エレミヤ 1:4-10、 II テモテ 4:1-3、
 - エペソ4:11-13、ピリピ2:1-4、エペソ2:22
- 6) I テモテ 5:22、出エジプト 29:35

解説

- 1) アナバプテストは、教会で霊的な指導をする特別の役目を果たす者たちを呼び集めました。彼らがこのように実践することになったのは、聖書を学び、秩序の必要性を覚え、天与の賜物について認識したためでした。こうして選ばれた指導者の目的は、他の信者の責任を免除することではなく、教会にあってはキリストと教会とを代表し、また、この世にあっては教会のためにそれらを代表するためでした。アナバプテストは、教会において特別の役目を持つ霊的指導者の必要性を軽視するために、"信者のすべてが祭司職"という概念を用いたのではありません。メノ・シモンズが"信者のすべてが祭司職(万人祭司)"と言ったのは、暗闇から光へと召し出してくださった神の証人となるために、信者のすべてが"祭司"として聖い生活を送るように励ますためでした(Iペテロ2:9)。
- 2) 新約聖書の中で、指導者の務めが最初に言及されているのは、弟子と使徒についてです。エペソ4:11では5つの務めを挙げ、使徒、預言者、伝道者、牧師、教師と言っています。Iテモテ3章では、監督と執事が挙げられています。また、新約聖書を見ると、3つのパターンが出てきます。すなわち、監督、長老、執事です。メノナイトの伝統にも、同じように、この3つのパターンが見られます。しかし、伝道者や宣教師を送り出すというような変化もありました。教会は、時々、その指導者の務めのパターンを状況に適合させてきましたが、伝道者、預言者、教師の承認を含めて、引き続き適合させていく自由を持たねばなりません。
- 3) 按手による任職式(または、認可[ライセンス]や委任[コミッション]など、それに類する行為)は、神からの召命、教会の確証、奉仕の務めに対する献身者の応答、教会の群れによる祝福が結合しているのを象徴するものです。任職式は、教会と教会の群れまたは協議会において、任用確認の過程を経たうえで執り行われます。それは一度限りの儀式であり、教会において、教会のための奉仕を続けることにより効力を保持します。按手による任職は、通常、ある教会または協議会の任務から別の教会、または別の協議会の任務に異動しても生きています。牧会の認可[ライセンス]は予備期間に関するもので、委任[コミッション]は、通常、指定した任務に関するものです。

第16条 教会の秩序と一致

私たちは、イエス・キリストの教会が多くの器官から成る一つのからだであり、 一つの御霊によって、信じる者が霊的に共に建て上げられて神の住まいとなるよ うに整えられると信じます1)。

神の民として、教会は、聖なる神殿 2)、霊の家 3)であり、使徒と預言者の上に建てられており、キリスト・イエス御自身がその礎石です 4)。教会の秩序が求められるのは、信仰と生活の重要な問題について一致を保つためであり 5)、互いに仕えたり仕えられたりしながら、キリストのからだが愛のうちに建て上げられるためです 6)。教会における愛と一致は、神の愛をこの世に証しするものです 7)。

教会員は意思決定するにあたり、それが指導者の選出であれ問題の解決であれ、 聖書を不変の道しるべとし、祈りに満ちた広い心で耳を傾け、かつ語ります。肯 定される場合だけではなく、誤りを正される場合も予期しておきます。事を識別 していく過程では、性急に判断を下すよりも、総意(コンセンサス)に導いてく ださる主からの言葉を忍耐強く待つほうを良しとします。

教会は、定期的に集うさまざまな集まり(assembly)であり、各個教会(local congregation)やより大きな協議会(conference)が含まれます。統一性の中にこのような多様性があることから、神への感謝の念と互いへの感謝の心が生じます。使徒教会の模範に倣って、各個教会は、信仰と生活に関する重要な事項について、教会の群れ(wider church)に助言を求め、それによって、全体がより共通の使命を持って共に労します⁸⁾。より大きな集まりや協議会でなされた決定事項は、それを構成するグループによって確認され⁹⁾、さらに、各個の務めは、集会の群れ(wider gatherings)によって励まされ、支えられます。権限と責任は全員による自発的な同意によって委任されるため、それぞれの教会は、教会生活のあらゆる面でキリストに対し、また教会同士に対して互いに責任があります。

- 1) エペソ 2:21-22
- 2) Iコリント3:16-17
- 3) Iペテロ2:5
- 4) エペソ2:20
- 5) 詩篇 133:1、 I コリント 14:33、エペソ 4:3
- 6) エペソ4:7、12-16、
- 7) ヨハネ 17:20-24
- 8) 使徒15:1-21
- 9) 使徒11:18

解説

1) 聖書にはある特定の教会政治形態についての規定、あるいは統治機関につい

ての規定はありません。それでも、旧約聖書と新約聖書の両方から、指針(ガイドライン)をいくつか拾い集めることはできます。イスラエル民族の宗教生活における祭司職と神殿とは、秩序の重要性と共に、公正、親切、謙虚さを遵守するのが見て分かる礼拝をすることへの関心の深さを思い起こさせます(レビ記8章 -10章、I列王6章)。使徒パウロは、教会がすべてのことを慎み深く、かつキリストの体を建て上げるために行うように求めました(Iコリント14:26、40)。新約聖書が強調しているのは、教会は、すべての教会員が参加して、その霊的賜物を活用するように励ます仕組みに組織されるべきであるということで、それは、礼拝をするため、意思決定をするため、教えたり学んだりするため、互いにいたわり合うため、さらには、この世にあって神から託された使命を推進するためであるということです。キリストの御霊は教会を導き、その組織を時と所の必要に適合するようにします。

- 2)総意(コンセンサス)による意思決定は、教会において一致に至る一つの方法です(使徒15:22参照)。総意とは、教会が共に御霊による一致を求めたことを意味します。教会は、多数の意見にも少数の意見にも、あらゆる発言に注意深く耳を傾けます。総意が得られるのは、その問題について教会の思いが一つになったときか、あるいは、反対者が、あるグループの決定を妨げたくないと表明したときです。総意は必ずしも完全な満場一致を意味しません。
- 3) 教会は神の民の集まりです。足しげく集まる各個集会が教会です。それほど 頻繁に集まることのない、より大きな協議会のグループもまた教会です(Iテサロニケ1:1、1ペテロ1:1)。教会員には、複数のレベルから成る協議会連合の ような、より大きな教会家族に対する責任はもちろん、各個集会への責任も生じ ます。さらに範囲を広げて、私たちは、共に仰ぐ主によって、時と所を問わず、 信じる者たちを包む普遍的な教会に結ばれています。私たちは、このような信じ る者のより大きな家族であることに感謝し、皆と適切な関係を育むことを求めま す。

メノナイト教会の組織は、信じる者の共同体としての教会が中心であることを 遵守してきました。ある人たちは、教会の主たる単位として、各個集会を強調し ました。またある人たちは、教会の群れ(協議会)を主たる単位とみなしました。 前者の場合は、各個集会が教会の群れに対する自らの責任の範囲を定める、集会 対協議会型の教会政治形態を示しています。後者の場合には、教会の群れがより 多くの権限を持つ、協議会対集会型の教会政治形態になっていました。私たちメ ノナイトの団体は、双方とも、どちらの型であるのか判然としてはいません。ある傾向に流れて、各個集会を主たる単位として推し進めたことがありました。これを強調すると各個集会の自発性が助長されますが、その反面、より広く託された教会の使命とより広範な教会協力を損ないかねません。教会は縫い目のない一枚の衣で、"2人または3人が集まる"(マタイ 18:20)最小単位から全世界の教会へと広がっているとみなされるべきです。説明責任と応答責任は、教会のどのレベルにもあてはまります。

第17条 弟子の道とキリスト者の生活

私たちは、イエス・キリストが、自分の十字架を負って後に従うようにと、私たちを招いておられると信じます。私たちは、神がくださる救いの恵みの賜物によって、イエスの弟子となる力を与えられ、イエスの御霊に満たされて、イエスの教えと御跡に従いながら、苦難を通して新しいいのちに至ります。私たちは、信仰によってキリストの道を歩むときに、キリストのかたちにつくり変えられていきます。私たちは、キリストと一致するようにされ、神の御心に忠実な者となり、この世の悪から分かたれるようになります。

私たちは、聖霊、祈り、聖書、教会を通じて神を経験することによって力を与えられ、いかにしてキリストに従うかを教えられます。さらに、私たちは、生活の中でキリストに従って行くとき、神との親密な関係に入れられ、キリストが私たちの中に住まわれます¹)。神は、恵みによって、私たちの中に働き、見えない神のかたちであるキリスト御自身のかたちに私たちをつくり直してくださいます。キリスト者の信仰が愛と真理のうちに働いているところには、必ず新しい創造があります。私たちは、新しく生まれることによって、神の家族に迎え入れられ、神の子どもとなります²)。私たちがキリストに参与することは、救いと弟子の道の両者を含みます。

キリストへの従順は、必然的にこの世に対する不従順を意味します³⁾。キリストを信じる真の信仰は、個人の幸せを思いどおりに追求するものではなく、神の御心を進んで行おうとするものです⁴⁾。真の信仰は、実利を追求するものではなく、まず素朴に神の統治を求めるものです⁵⁾。真の信仰は、暴力や軍事的手段によって行動するものではなく、平和と正義によって行動するものです⁶⁾。真の信仰は、私たちに忠節を求める国家や民族集団に忠誠を尽くすものではなく、まず神に対して忠誠を尽くすものです⁷⁾。真の信仰は、私たちが真実を述べる保証として宣誓に頼るものではなく、正直に真実を断言するものです⁸⁾。真の信仰は、神の御心に反して性的関係をゆがめるものではなく、結婚の聖約に対して貞節で

あり、愛に満ちて忠実であるものです⁹⁾。真の信仰は、常習的な行為に陥るのを許すものではなく、私たちのからだを神の宮として取り扱うものです。真の信仰は、罪が私たちを支配するままにしておくものではなく、生活を聖くし、あわれみと和解の行動をなしていくものです¹⁰⁾。キリストへの私たちの忠実さは、神にふさわしく分かたれた民、聖なる民である教会共同体の愛の生活と証しの中で実践されます。

私たちは、生活のあらゆる面でイエスの弟子となるように召されています。イエスは私たちの模範であり、特に、義のために報復せずに苦しむこと 11 、敵を愛すること、迫害する者を赦すことの模範です。しかも、私たちは、イエスに従うとき、十字架に目を向けるだけではなく、その十字架を通して、復活の喜びにも目を向けます。私たちは、いのちに至る狭い道を選ぶ者を神が擁護してくださることに希望を置きます 12 。"もし、私たちが、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きるようになります。もし耐え忍んでいるなら、キリストと共に治めるようになります 13 。"

- 1) ピリピ3:10
- 2) ローマ8:12-17、
- 3) ローマ12:1-2
- 4) マタイ 26:39
- 5) マタイ 5:3、6:25-33
- 6) ゼカリヤ4:6、マタイ5:6、9、38-48
- 7) ヨハネ24章、詩篇47、使徒5:29
- 8) マタイ 5:33-37
- 9) マタイ 5:27-30
- 10) ミカ6:8、ローマ6:12-14
- 1 1) Iペテロ 2:21-23、ローマ 12:9-21
- 12) マタイ 7:13-14
- 13) Ⅱテモテ 2:11-12

解説

1) キリスト者は、この世の悪から離れているように召されています。私たちの不従順は、教会の外の人たちとの接触からすべて身を引くことではありません。むしろ、私たちは考え方を変えられ、その結果、罪に満ちた行いと、罪を促すグループを避けます(ローマ 12:2、 I コリント 5:9-10)。私たちがこの世の悪い道

に従わないなら、他の人たちの方で私たちから離れていくようになります(ヨハネ 3:20)。私たちがキリストに従順で、聖霊によってキリストのかたちにつくり変えていただこうとすれば、悪に対しては不従順になることができます。

2) 苦難は、しばしば弟子の道から生ずる結果であるかもしれません。イエスは言われました。"だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。"(ルカ 9:23) 初期のキリスト者たちも、イエスは悪をもって悪に報いることのない模範を示された方であったので、信仰のゆえの迫害は、イエスの苦難に共に与ることであるとみなしました(ヘブル 2:10、Iペテロ 3:8-18、4:12-19)。しかし、苦難のための苦難を求めるべきではありません。イエスは苦しむ多く人を癒されました。ですから、癒しのために祈り、悪から救い出されることを祈るのは正しいことです(マタイ6:13)。神は、私たちを教え、救いをもたらすために、苦難を用いることのできるお方ですが、だれをも誘惑なさらず(ヤコブ 1:13)、私たちが苦しむことも望んではおられません。

イエスは、義のために苦しむ者に祝福を約束なさいました(マタイ 5:12、ルカ9:23-26)。新約聖書は、弟子の道をキリストへの参与、すなわち、イエスの働き、イエスの苦難と死、イエスのよみがえりへの参与と捉えています。(例えば、Ⅱコリント 4:7-12)。イエスの苦難に与る者は、イエスの栄光にも与ります。私たちのすべてを神の御支配にささげることは、私たちに大きな喜びをもたらします(マタイ 13:44-46)。

- 3) 弟子の道は、キリスト者の共同体とのかかわりの中で実践されます。私たちは個人としてイエスに従うように召されていますが、教会共同体も弟子の道を生きるように召されています。教会において、弟子の道は、戒規や互いへの配慮とも密接に結びついています。キリストの弟子は、互いへの愛において、また互いへの責任において、いかにしてキリストにより緊密に従っていけるかを共に学び合います。
- 4)以下の箇条では、弟子の道についての具体的な面を取り上げています。"キリスト者の霊性"(第18条)、"家族、独身、結婚"(第19条)、"真実と宣誓の忌避"(第20条)、"キリスト者のスチュワードシップ"(第21条)、"平和、正義、無抵抗"(第22条)、"政府と社会に対する教会の関係"(第23条)。また、信仰と忠実さの学び合いについては、第8条 "救い"も参照してください。

第18条 キリスト者の霊性

私たちは、イエスの弟子であることは御霊におけるいのちを知ることであると信じます。私たちが神との交わりを経験するにつれて、イエス・キリストの生と死とよみがえりが、私たちの中に形づくられ、私たちはキリストのかたちに成長します。聖霊は、個人による礼拝にも共同体による礼拝にも臨在し、私たちを神の知恵の深みへと導びき入れてくださいます。

私たちは、キリストを告白し、洗礼(バプテスマ)を受けることにより、キリストを通して神との新しい関係に入れられます。神の愛のうちに、私たちの生のすべてが自由にされ、つくり変えられ、再び整えられ、新しくされます。神を愛し、神を知ることにより神との交わりを経験するとともに、私たちは、ますます自分の生き方をイエスの生き方、すなわちイエスの生と死とよみがえりと同じにされるようになります。私たちは、自分自身を神に明け渡し、聖霊によって、キリストのかたちになるように形づくっていただきます¹¹。私たちは、個々のキリスト者としてまた教会として、神との関係を保ち、イエスの生き方を表し、聖霊に満たされるようにと召されています。私たちは、あらゆる点で成長して教会のかしらであるキリストに達し、キリストを通して、教会は、愛のうちに建て上げられます²¹。

ぶどうの枝が幹から生気を汲み取るように、私たちは、キリストから御霊のいのちを汲み取ります。その幹から切り離されるなら、御霊の力も私たちを満たすことはできません。しかし、キリストの中に私たちの住まいをつくり、キリストが私たちの中に留まっておられるとき、私たちは実を結び、キリストの弟子となります³)。私たちが御霊と共にいるとき、歩みも御霊に合わせ、行動において御霊の実を示します⁴)。外に現れる私たちの行いは、内にあるいのちと調和します。

霊の訓練、すなわち祈り、聖書の学び、神についての静思、共同の礼拝、讃美の歌、簡素な生活、証し、奉仕などは、敬虔を養うためのものです⁵⁾。このような訓練は、私たちに神との関係を深めさせ、私たち自身をより完全に神の御手に委ねるようにさせます。訓練は、試練と苦難の時に対する備えでもあります。もし私たちがより平穏な時代に神の臨在を体験するなら、困難な時代に神を知るのはもっとやさしいことが分かります。

私たちは、われらの主キリスト・イエスにある神の愛から私たちを引き離すことは、何ものにもできないと確信します⁶⁾。なぜなら、神は、私たちの霊の成長を助けるために、喜びも苦難も用いることがおできになるからです⁷⁾。今の時は、私たちの中におられるキリストが、私たちの栄光の望みです⁸⁾。私たちは、神について今は一部分しか知らなくとも、やがて完全に知るところとなり、顔と顔と

を合わせてお会いできるようになる、その時を待ち望みます9)。

- 1) Ⅱコリント3:17-18、ピリピ3:21
- 2) エペソ4:15-16
- 3) ヨハネ 15:5-8
- 4) 詩篇1編、ガラテヤ5:22-26
- 5) I テモテ 4:7-8
- 6) ローマ8:35-39
- 7) マタイ 5:1-12、詩篇 119:67
- 8) コロサイ 1:27
- 9) I コリント 13:12

解說

- 1) "霊性(spirituality)" とは、聖霊にあるいのちと神を経験することを指すのに用いられる比較的新しい用語です。アナバプテストとメノナイトは、霊性を表すためにいくつかの言葉を用いて来ました。敬虔、謙虚さ、ゲラッセンハイト(Gelassenheit:服従または放棄)、フレミングカイト(Frömmingkeit:敬虔)、ナッハフォルゲ(Nachfolge:キリストに従うこと)などです。これらの概念はすべて、神を知ることと神の御心を行うことに向けて徹底的に心を開くことに関係があります。彼らは霊性と倫理、あるいは静思と行動とを切り離してはいません。そのようなわけで、この信仰告白では霊性を弟子の道についての項目に入れています。イエスは、心の純粋な(あるいは清い)者は神を見ることになると説かれました(マタイ 5:8)。
- 2) 多くの宗教的伝統が霊性あるいは神体験について語っています。人は、しばしば、そのような体験が、実はすべて同じものであると主張します。しかし、キリスト教の霊性に関する歴史の中には、少なくとも二つの異なる流れが認められます。主としてギリシャ哲学の影響を受けた流れにおいては、その到達点は神との一体化(union)、すなわち個人が神に吸収されることです。隣人を愛することやキリストに従うことは、この神との一体化から生まれる副産物です。

第二の流れは聖書の思想の影響をより多く受けているものです。この思想による営みや思索の行き着くところは、神との交わり (communion)、すなわち神との契約関係にあります。それは、信じる者の生き方として、イエス・キリスト — その生と死とよみがえり — に焦点を合わせて絞り込みます。生きることにおいて、

キリストを知ることとキリストに従うこととが織り合わされているという認識を持ったのは、16世紀のアナバプテストが最初ではありませんでした。それより先の多くの非国教徒も、霊的な洞察と倫理とを結びつけていました。この信仰告白は、聖書のとおりに、キリスト者の霊性はキリストとその生き方により定義されるということを支持して、より強く第二の流れと同じ見方をしています。

- 3) 聖霊は、神の民の個々人にも共同体にも臨在されます。新約聖書は、聖霊の宮あるいは聖霊の住まいとして、集合体とキリスト者個人の両者に言及しています(Iコリント3:16-17、エペソ2:21-22、Iコリント6:19)。個人の黙想も共同体の礼拝も、また個人の行動も共同体の活動も、いずれの場合も、聖霊が、私たちの中で、私たちの間で、私たちを通して働きます。
- 4) この第 18 条で述べている霊の訓練のリストは完全なものではありません。断食や日誌をつけること、施し、その他の訓練なども含まれていてもよいものでした。霊の訓練を実行すること自体が良いことであり、さらにそれがほかの望ましい結果を生み出します。聖書研究は、神についての知識を高めるように私たちを導くだけではなく、私たちが神を知るための導きもします。礼拝は、私たちが神への讃美を表し、神への忠誠を宣言するのに役立つだけではなく、私たちの霊の成長も助長します。施しを行うことは、貧しい人々の援助に役立つだけではなく、私たちを物質的なものに執着し過ぎないようにして、私たちが神の国を求めるための助けもします。

第19条 家族、独身、結婚

私たちは、神が人の生活を家族から始め、家族を通して祝福しようとされていると信じます。さらに神は、すべての人が教会の一員になること、すなわち神の家族になることを望んでおられます。教会の家族である独身者と既婚者とが互いに養い養われ、癒し癒されるとき、キリスト者の家族関係は神の御心である完全な一体に向かって成長することができます。

私たちは、神が人を造られたのは関係を持たせるためであったと認めます。神は、家族を通して、特に信仰の家族を通して、人の生活を祝福しようとなさいます。キリスト者はすべて、神の家族の中でその存在を認められ、メンバーは互いに兄弟姉妹として接します¹⁾。私たちは、教会という家族の中では、独身と既婚のそれぞれの良さが尊重されると考えます²⁾。私たちは、独身の生き方を尊重し、教会という家族の生活と活動の中で、独身者を尊敬し、独身者を含めるように教

会を奨励します。信仰による家族は、地上のすべての家族に対する祝福となるように召されています³⁾。

私たちは、神が結婚を一人の男と一人の女の間の生涯にわたる契約にしようとしておられると信じます⁴⁾。キリスト者の結婚は、キリストにあるお互いの関係であり⁵⁾、教会とのかかわりの中でなされる契約です。聖書によれば、正しい性的結合は結婚関係の中においてのみなされるものです⁶⁾。結婚には、性的な親密さ、仲間としての親交、子どもの出産と養育という意図が込められています。

子どもはとても大切な存在です。イエスは、神の御支配の受け入れ方の手本として、子どもたちを見ておられました⁷⁾。子どもたちは、家庭でも教会でも、愛され、しつけられ、教えられ、尊重されます。子どもたちも、主にあって両親を敬い、両親に従います⁸⁾。年若い人は、家庭でも教会でも年長者を敬います⁹⁾。

教会は、夫婦が結婚関係を強めるのを助け、不和の時には和解を勧めるように 召されています。教会はまた、難しい家族関係を抱えている人に、真実と深い同 情をもって仕えます。教会は、神の家族として、家族のために希望と癒しを与え る聖なる場となるように召されています。

- 1) 詩篇 27:10、ルカ 8:19-21、エペソ 2:19
- 2) Iコリント7:38
- 3) 創世記 12:1-3、使徒 3:25
- 4) マルコ 10:9、 I コリント 7:10-11
- 5) エペソ5:21
- 6) 出エジプト20:14、Iコリント6:12-20
- 7) マルコ 10:13-16
- 8) 出エジプト20:12、エペソ6:1-4
- 9) Iテモテ 5:1-2

解説

- 1)家族といえば血縁関係、婚姻関係、あるいは養子縁組を指すのが一般的ですが、聖書は、教会もまた家族であると述べています。特に新約聖書でよくあるのは、キリスト者を兄弟姉妹と言い、神の子と言っていることです(ローマ8:12-17、ガラテヤ4:5-7、ヤコブ2:15 参照)。
- 2) 教会には独身のままでいる人や独り身になる人が多くいます。イエスは、ある人たちには、神の御支配に仕えるため独身の人生を選択するように勧められま

した (マタイ 19:12、ルカ 14:20)。パウロは結婚を有益な選択と見なしましたが、自分は無条件で主に献身するため、自ら進んで独身でいる方を良しとしました (I コリント 7:25-35)。

- 3) 聖書は、性的な親密さを神の正しい秩序の中に位置づけています(創世記2:23-25)。性的結合は、結婚の絆が結ばれるときのためにあります(出エジプト20:14、マルコ10:11、ローマ7:1-3)。性的結合は楽しさと親密感を満たすため、そして生殖のためにあります。人の家族は生殖を通して次々と世代が継続します。夫と妻とが一体であるのは、神の一体性と、キリストと主の教会との一体性を反映している秘儀であります。私たちは、結婚するキリスト者は主にあって結婚し、キリスト者の配偶者と結婚すべきであると確言します。
- 4) 教会の中には、離婚、虐待、不倫のほか、結婚生活や家庭生活が重荷になるか立ち行かなくなる問題を経験する者もいます。イエスは、結婚が神聖なものであることを断言し(マタイ 5:32)、離婚の究極的な原因として、心のかたくなさを指摘されました(マルコ 10:4-9)。今日の教会は、結婚の永続性を支持し、不仲の夫婦が和解に向けて踏み出すのを助ける必要があります。それと同時に、和解と赦しの共同体として、教会は、癒しと新しい始まりを提供します。教会は、個人と家族に力と癒しをもたらすものです。

第20条 真実と宣誓忌避

私たちは、真実を語り、ただ「はい」または「いいえ」とだけ答え、宣誓を避けることを決意します。イエスは弟子たちに、決して誓ってはならず、そのとおりであれば「はい」、そのとおりでなければは「いいえ」と言いなさいとお教えになりました¹)。私たちは、この教えが、神を汚す言葉を避けるために適用されるだけではなく、真実を語ることにも適用されると信じます²)。宣誓は、しばしば、人が真実を語っているという保証としてなされます。これは、宣誓をしなければ、人は真実を語ることにあまり注意しないかもしれないということを暗示しています。イエスに従う者は、いつも真実を語り、法的問題では、自分の陳述が真実であると確言することしかしません。

イエスはまた、宣誓によって、将来を神に保証していただこうとすることを戒められました。私たちは、信仰によって自分の将来を神に委ねます³⁾。

歴史を通じて、人の手による政府は、市民に忠誠を表す宣誓を求めてきました。 キリスト者として、私たちの第一の忠誠は神に対するものです⁴⁾。私たちは、洗 礼 (バプテスマ) によって、キリストの共同体への忠節、すなわち、ほかのどのような社会的、政治的共同体への服従にもまさる献身を公約しました。

- 1) マタイ 5:33-37、ヤコブ 5:12
- 2) エペソ4:15、29
- 3) マタイ 5:34-36
- 4) 使徒 5:29

解說

- 1) 聖書の言語では、真実 (truth) は忠実 (faithfulness) と関係のある言葉で、関係において忠実である (真実であること) だけではなく、事実に対して忠実であること (真実を話すこと) も表します。キリスト者共同体の中で、愛をもって真実を語ることは、正確に話すことへの私たちの責任を示すだけではなく、正しい関係への責任も示しています。
- 2) 私たちは、アナバプテスト・メノナイトの伝統に従います。それによると、宣誓に反対するイエスの言葉を、通常、次のような仕方で適用してきました。法廷や他の法的問題においては、誓うのではなく断言すること。無条件で真実を語ることに努め、約束を守ること。宣誓で結ばれた団体、または秘密結社の会員になるのを避けること。キリストを通じて私たちが尽くす、神への究極的な忠誠と相容れないような忠誠を求める宣誓を拒否すること。神を汚す言葉による一切の宣誓を避けること。

宣誓をせずに真実を述べ、私たちの関係において真実であるようにというイエスの忠告は、家庭生活、商取引、宣伝広告、それと私たちが取り交わすそのほかの協約にも当てはまります。

第21条 キリスト者の管理の務め(スチュワードシップ)

私たちは、すべてのものが神に属すると信じます。神は、私たちに託したすべてのものの忠実な管理人として生きるようにと、私たちを教会として召しておられます。

神のしもべとして、私たちの第一の務めは、神の家の管理人(スチュワード)であることです¹⁾。神は、キリストにあって私たちに新しいいのちを与えてくださり、さらに、教会の成長と宣教の務めに用いるため、私たちに霊の賜物も与えてくださいました²⁾。和解のメッセージは、信じる者すべてに託されました。そ

れは福音の奥義が、教会を通して世界に知られるためです3)。

私たちは、時間も神に属すると信じ、時間の管理人として、それを注意深く使うべきであると信じます⁴)。そのうえ、ごく初期の時代から、神の民は、休息と礼拝の特別な時間を守るように命じられてきました。旧約聖書では、第7の日は、神が創造の御業を終えて休息なさった日であることから、聖なるものとされました⁵)。安息日もまた、神がヘブル民族を奴隷から解放なさったゆえに聖なるものでした⁶)。イエスを通して、時間はすべて聖なるものであり、神のために聖別されていて、救いと癒しと正義のために用いられるものです⁷)。現在、教会は、一般に週の最初の日を聖なる休息の日として祝い、常に安息日の正義にしたがって生きるように召されています。

私たちは、神がすべての物の所有者であると認めます。旧約聖書では、安息年とヨベルの年によって、土地が神の所有物であり、イスラエル民族は神に属するという信仰を実践的に表現しました⁸⁾。イエスは宣教の初めに、しばしばヨベルとみなされる主の恵みの年を告げられました。イエスを通して、貧しい者は福音を聞き、捕われている者は解放され、目の見えない者は視力を得、抑圧されている者は自由の身となりました⁹⁾。エルサレムの最初の教会は、福音を伝え、病める者を癒し、財産を共有することによって、ヨベルを実践しました。ほかの初代教会でも、貧しい人と経済的な分かち合いをしました¹⁰⁾。

神が所有する大地の管理人として、私たちは、大地を管理し、地とその上に生きるすべてのものに安息と再生をもたらすように召されています 11 。金銭と財産の管理人として、私たちは、簡素な生活をし、教会内の相互扶助を実践し、経済の公正を守り、惜しまず喜んで与えます 12)。神の摂理に依り頼む者として、私たちは、生活の必要を思い煩わず、まず神の国を求めます 13)。私たちは、富の欲望によって真の神のしもべになることはできず、富の欲望に支配されたままの生活をすることもできません。

私たちは、神に仕えるために選び分けられ、神の家における管理人となるように召されています。私たちは今、神が約束なさった安息と正義を経験しています¹⁴⁾。教会は、私たちの主が来られて、新しい天と新しい地ですべてのものが回復するのを待ち望みながら、この安息と正義を実践します。

- 1) ルカ 12:35-48、 I コリント 4:1-2
- 2) Iペテロ4:10-11、テトス1:7、2:5
- 3) Ⅱコリント5:18-20、エペソ3:1-10
- 4) 詩篇 31:15、エペソ 5:15-16、コロサイ 4:5

- 5) 出エジプト20:8-11
- 6) 申命記 5:12-15
- 7) マルコ 2:27-28
- 8) レビ記 25:23、42、55
- 9) ルカ4:16-21
- 10) 使徒2:44-45、4:32-37、Ⅱコリント8:1-15
- 11) 詩篇24:1、創世記1:26-28
- 12) ピリピ4:11-12、Ⅱコリント8:13-14、ヤコブ5:4、Ⅱコリント9:7
- 13) マタイ 6:24-33
- 14) マタイ 11:28-29、黙示 7:15-17

解說

- 1)新約聖書で管理の務め(スチュワードシップ)という言葉は、主として、福音のスチュワードシップに関連して用いられています。しかし、より広い意味では、スチュワードシップは、その家のかしらとしての神という概念に関係があり、キリスト者は、その家で責任を委ねられた神のしもべ、あるいは支配人、または息子や娘にあたります。紀元1世紀における家は、経済単位の役割をはたしており、しばしば血縁関係のない人たちを含んでいました。したがって、管理の務め(スチュワードシップ)という言葉は、福音の分かち合いに対する私たちの責任と、時間や物的資産や金銭に対する私たちの責任の両方を指すようになりました。
- 2) 簡素な生活という私たちの伝統は、倹約のための倹約に根ざしているのではなく、私たちの物的な必要を、あらゆるものの所有主である神により頼むことに根ざしています。私たちは、食物や衣服も、救いも、また、いのちそのものについても、神からいただく恵み深い賜り物(ギフト)に頼ります。私たちは、金銭や財産にしがみつく必要はなく、かえって、神が与えてくださるものを分かち合うことができます。相互扶助の実践は、信仰による家族の中に生活必需品を欠く者がだれ一人いないようにするため、神からの賜り物を分け合うことの一部です。財産共同体を通してなされようと他の財政共有形態を通してなされようと、寡婦や孤児、在留異国人、そのほか経済的必要のある人に特別の配慮をするという点で、相互扶助は、イスラエル民族の慣習を継続するものです(申命記 24:17-22)。十分の一の献げ物や初物の奉献も、このような経済的分かち合いの一部でした(申命記 26 章、比較:マタイ 23:23)。

- 3)経済の公正は、めぐり来る安息日の欠かせない部分です。安息年は、安息日と同じように、土地と働く者に休息と解放をもたらします。7の7倍の年、すなわち50年目の年であるヨベルの年もまた、家族の所有地の返却、負債の放棄、雇われ人の解放によって公正と慈愛をもたらしました(レビ25章)。安息・ヨベルの年の律法の効果により、50年毎に相対的な経済の平等が回復しました。イエスは、弟子たちにこのように祈ることを教えています。「われらの負い目をお赦しください。われらもわれらに負い目のある者を赦しましたから(マタイ6:12)」と。来るべき時代には、聖徒は、経済的に必要な物を必ず手にします(黙示7:15-17)。私たちは、まず神の国を求め、消費主義や歯止めなき競争、過大な生産性、貪欲、独占欲に終止符を打ちます。
- 4) 旧約聖書の時代には、安息日が守られていただけではありません。安息年やヨベルの年も守られていたという証拠もあります。ヨベルの律法は、レビ記 25章、27:16-25、民数記 36:4 にあります。ほかに安息年やヨベルの年に関する記述は、申命記 31:10、II 歴代誌 36:21、イザヤ 37:30、61:1-2、エレミヤ 34:8-22、エゼキエル 46:17 にあります。紀元 1 世紀のユダヤ人歴史家ユセフスは、安息年やヨベルの年には土地が休耕地となるため、パレスチナに住むユダヤ人がひもじい思いをした期間があったと書いています。ローマ政府は、安息年の間はユダヤからの貢物を免除しました。エルサレム教会とキリスト教徒の教会で続けられた経済的な分かち合いの実践は、ヨベルの持つ経済的な側面が継続して実行され、都市環境に順応していたことを証拠づけるものです。
- 5) スチュワードシップ (stewardship:管理の務め) の神学は、私たちに、人への配慮を意識させるだけではなく、ほかの被造物への配慮も意識させてくれます。動物と畑地とは、安息日や安息年の恩恵を受けました。安息日・ヨベルの遵守ということによって、私たちは、大地を管理し、保全するように召されています。私たちは、新しい天と新しい地のモデルに従った現在の生き方として、地球資源を正しく利用する責任を負っていることになります。

第22条 平和、正義、無抵抗

私たちは、平和が神の御心であると信じます。神は、平和な世界を創造されました。 神の平和は、イエス・キリストにおいてあますところなく完全に現わされています。キリストは、私たちの平和であり、全世界の平和です。私たちは、聖霊に導かれ、キリストに従って平和の道をたどり、正義をなし、和解をもたらし、

たとえ暴力や戦争に直面しても無抵抗を実践します。

神は、平和な世界を創造されましたが、人間は、不義と暴力の道を選びました¹⁾。復讐の思いが増大し、暴力は増幅しましたが、それでも当初あった平和と正義のビジョンは消滅しませんでした²⁾。預言者のほか、神の御言葉を伝える者は、イスラエルの民に武器や軍事力に頼るのではなく、神を信頼するようにと教え続けました³⁾。

人間と被造物に対して神の御心にある平和は、イエス・キリストの中にあますところなく完全に現わされました。平和を告げる喜びの歌が、イエスの誕生を知らせました⁴⁾。イエスは、敵を愛することを教え、悪事をなす者を赦し、正しい関係を求められました⁵⁾。イエスは、脅されても抵抗することを選ばず、進んで御自分のいのちをお与えになりました⁶⁾。その死とよみがえりによって、イエスは、死の支配を取り除き、私たちに神との平和を与えてくださいました⁷⁾。このようにして、イエスは、私たちを神と和解させ、私たちに和解の務めを託されました⁸⁾。

イエスに従う者として、私たちは、平和と正義をなすイエスの働きに参加します。イエスは、平和をつくり、正義を求めるところに祝福があることを知るようにと私たちを召されました。私たちは、柔和な心でこれを行い、義のためには進んで迫害を受けます⁹⁾。キリストの弟子として、私たちは、戦争に備えることもなく、戦争にも兵役にも参加しません。イエスに力を与えたその同じ御霊に力を与えられて、私たちは、敵を愛し、復讐を求めずに赦し、正しい関係を実践し、争いの解決には信仰共同体に頼り、暴力によらずに悪に抵抗します¹⁰⁾。

御霊に導かれ、教会から始めて、私たちは、暴力が神の御心ではないことをすべての人に証言します。私たちは、国家間の戦争、人種や階級間の敵対心、子どもや女性への虐待、男女間の暴力、妊娠中絶、死刑を含むあらゆる形態の暴力に反対する証言をします。

私たちは、恵みと平和の神に究極の忠誠をささげます。神は、日々善をもって 悪に勝利するように教会を導き、私たちに正義を行う力を与え、神の平和な統治 という輝かしい希望のうちに、私たちを支えてくださいます¹¹⁾。

- 1) 創世記1章-11章
- 2) イザヤ2:2-4
- 3) レビ 26:6、イザヤ 31:1、ホセヤ 2:18
- 4) ルカ2:14
- 5) マタイ 5:44

- 6) マタイ 26:52-53
- 7) I コリント15:54-55、ローマ5:10-11、エペソ2:11-18
- 8) Ⅱコリント5:18-21
- 9) マタイ 5:3-12
- 10) マタイ 5:39、 I コリント 6:1-16、ローマ 12:14-21
- 11) イザヤ11:1-9

解說

1) 平和に関する聖書の概念には、神との個人的な平和、人間関係における平和、国家間の平和、神の被造物との平和が含まれます。旧約聖書で平和(シャローム)という言葉は、癒し、和解、安寧を含んでいます。平和とは戦争がない状態というだけではありません。それは正しい関係の回復をも含むものです。

正しい関係には正義と平和の両者を伴いますので、この両者は一体をなすものです。ギリシャ人やローマ人の正義観に従えば、人は、自分が受けるにふさわしいと思うものを手に入れるのは当然のことでした。聖書によれば、正義には癒しと関係の回復を伴います。そのため、聖書では明らかに、貧しい者、虐げられている者に特別の関心を向けています(申命記 24:10-22、マタイ 20:1-16、ヤコブ2:5)。

無抵抗とは、"抵抗しないこと"を意味します。私たちの模範は、非難や虐待にも仕返しをすることなく耐え忍んだイエスです。イエスは、時には、悪事を働く者と対決なさったこともありましたが(マタイ 23:1-36、ヨハネ 2:13-22)、それとても、いかにして善によって悪に打ち勝つかを私たちに示す、非暴力の方法で対決されたのでした(ローマ 12:21、参照 I ペテロ 2:21-24)。

2) 平和と正義は、キリスト者が受け入れたり断ったりできる助言のような、自由に選べる教えではありません。これらは福音のメッセージの核心に属するものです。メノナイトの平和の立場は、時には、イエスの教えにだけ基づいていました。聖書から分かる平和は、それだけではなく、キリストによる贖罪の犠牲にも基づいています。したがって、贖罪は、神と私たちとの平和(ローマ 5:10)、及び私たちお互い同士の平和のための土台をなしています(エペソ 2:13-16)。

同じように、正義は、単にイエスの教えにだけ基づくのではなく(ルカ 4:18-19)、 イエスの贖罪の死にも基づいています。イエスの十字架上の死は、正義を全うするものでした。イエスの十字架の死は赦しをもたらし、それによって、罪人を神 との正しい関係に立ち返らせました。罪と不正の関係に陥っている世のために、 イエスは、十字架の上で神に向かって大声で叫ばれました。この叫びは、滴る血潮によって一層強められました。この血潮が、新しい契約による正しい、赦しの共同体をつくります(ヘブル5:7-10)。

- 3) これまでのメノナイトの信仰告白に続いて、私たちは、戦争への不参加には、 兵役への良心的拒否と暴力に対する無抵抗の対応を伴うと断言します。 私たちの 平和の証しには、平和つくりと正義のための働きも含まれています。 たとえ、私 たちの住む国が今戦争をしていなくても、平和の証しは必要です。 日常的な争い ごとの仲裁や調停、また非暴力的解決による働きは、キリストの平和の道に対する私たちの献身を表すものです。
- 4) 旧約聖書における戦争行為を簡単に説明できるものは何もありません。旧約 聖書は、繰り返して、平和を指し示しています(出エジプト 14:13-14、士師 7:2、 詩篇 37 篇、イザヤ 31 章、ホセア 2:18)。旧約聖書も新約聖書も、イエス・キリ ストによって説かれ、啓示された(使徒 10:36)、来るべき平和な御国のビジョン を宣言しています(イザヤ 9:1-7)。

第23条 政府と社会に対する教会の関係

私たちは、教会が神の"聖なる国民"であり¹⁾、そのかしらであるキリストに全き忠誠を尽くし、すべての国に神の救いの愛を証しするように召されていると信じます。

教会は、神のみに忠誠を尽くす霊的、社会的、政治的なからだです。私たちは、神の国の市民として²⁾、私たちを守ってくださる神の愛の力に信頼します。教会には地理的な境界は何もなく、教会を守るための暴力もまったく必要がありません。キリスト者の唯一の国家は、イエス・キリストの教会であり、それはあらゆる民族や国の人々から成り³⁾、神の栄光を証しするように召されています。

教会とは対照的に、この世の政府当局は、社会秩序を維持するため神によって制定されました。そのような政府や人間による他の組織は、神のしもべとして正しく行動し、秩序をもたらすように召されています⁴⁾。すべてのそのような組織と同様に、国家は、全き忠誠を要求する傾向があります。それらは、やがて偶像崇拝的になり、神の御心に逆らうようになります⁵⁾。政府は、それが最も良く機能しているときでも、神の正義に従って完全に行動することはできません。なぜなら、教会以外には、神の支配が自らの土台であると告白する国は一つもないからです。

キリスト者として、私たちは、権威を持つ人たちを尊重し、政権の座にある人たちをはじめ、すべての人のために、彼らも救われ、真理を知るに至るようにと祈ります⁶⁾。私たちは、キリストから教えられた愛と聖さに背かず、キリストへの忠誠を曲げない限り、行政やほかの社会組織に参与することが許されます。私たちは、キリストの道を示す、あの"山の上にある町"になることによって、国々に証しをします⁷⁾。私たちはまた、キリストの使節となることによって証しをし⁸⁾、国々(そして、すべての人々と組織)に対して、すべての人のための正義と平和とあわれみに向けて行動するように呼びかけます。そうすることにより、私たちは、神が私たちを遣わしてくださった町の繁栄を求めます⁹⁾。

私たちは、キリストがその死とよみがえりによって、すべての政府をはじめ諸々の権力に勝利されたのを知っています¹⁰⁾。私たちは、イエス・キリストが主の主として高く上げられたと告白するゆえに、究極的に、他に権威を主張できるものはないことを認めます。

- 1) Iペテロ2:9
- 2) ピリピ3:20、エペソ2:19
- 3) 黙示 7:9
- 4) ローマ13:1-7
- 5) エゼキエル 28 章、ダニエル 7 章 8 章、黙示 13 章
- 6) Iテモテ 2:1-4
- 7) マタイ 5:13-16、イザヤ 49:6
- 8) Ⅱコリント5:20
- 9) エレミヤ 29:7
- 10) コロサイ2:15

解説

1) "聖なる国民"というような教会用語は馴染みがないかもしれません。私たちは、しばしば、新約聖書にある政治的用語を霊的に解釈してしまい、王国や主、さらには教会(字義通りには"集まり"または"市民集会")を表すギリシャ語さえも政治的用語であることを忘れています。ここでいう政治的とは、集団関係のどのような体系化をも指しています。教会を国民として理解することにより、世界の国々に対する教会の関係を一層はっきりさせます。

4 世紀以前、およそローマ皇帝コンスタンチヌスの頃、多くのキリスト者は、 自分たちは神の国民であり、ユダヤ人と異邦人の信者から成り、諸国に住み、し かもそれらの国においては寄留者だと思っていました(Iペテロ 2:11-17、ヘブル 11:13-16)。キリスト教が国家の宗教になると、皇帝は(たとえ暴力を使うことがあっても)信仰の守護者と見なされるようになりました。教会員は、もはや自発的になるものではなくなりました。宣教の努力は、主として帝国以外の地にいる人々に向けられました。現在でも、キリスト教がすでに国教ではなくなっている地において、政府が宗教の擁護者であることがしばしば見られ、教会は政府の政策を支持するように期待されています。

私たちは、キリストがすべてのいのちを支配する主であると信じます。教会と 国家とは別々の存在であり、しばしば私たちの忠誠を求めて競い合う相容れない 組織です。私たちは、政府によって秩序の維持が可能であること、政権の座にあ る者に敬意を払うべきであることを知っています。しかし、私たちの"恐れ"は、 だた神にのみふさわしいものです(Iペテロ 2:17)。政府の要求がキリストの要 求と相容れない場合、キリスト者は、"人間のどんな権威に従うよりも神に従いま す(使徒 5:29)"。

- 2)神はすべての人のために、ある御心を持っておられます。それが救いであり、神の民に加えることです。領土を所有する国家とその政府は、神の御心を果たしうる能力に限界があります。それは、彼らが、少なくとも最後の手段として、暴力に頼るからであり、自分たち自身を神の座に据えようとしたがる傾向があるからです。しかし、相対的な正義によって行動し、秩序を与える政府であれば、無政府状態や、不当で抑圧的な政府よりはましです。キリスト者は、たびたび、国家に対して証しをし、国家がより高い価値に従って行動するように、また、神が教会に期待している基準には及ばないとしても、国家が神の御心の遂行により近くなるような基準に従って行動するように要求することがあります。キリスト者は、政府に対して証しをする責任がありますが、それは、自分たちがある特別の国の市民であるという理由によるだけではなく、すべての人にキリストのあわれみを示し、人がつくったすべての組織に対するキリストの主権を宣言するためでもあります。
- 3) さまざまな政治的、社会的問題について、個々のキリスト者は、いかにしてこの世に属さずにこの世にいられるかを認識するために、教会の助けを必要とします(ヨハネ 17:14-19)。教会は、次のように問いかけます。政治や他の社会組織に参加することによって、キリストの和解の使節になることができますか。そのような参加が、キリストの道への献身に反したり、キリストへの忠誠を曲げた

りすることになりませんか。このような問いかけをするのは、以下の諸問題に直面するときです。軍務への就役、官職への就任、公務員への就職、投票、納税、経済組織への関与、この世の裁判所の利用、忠誠を表す宣誓、さまざまな旗の使用、公立や私立の学校教育、法律の影響力を求めること、などです。これに関連して、"弟子の道とキリスト者の生活"(第17条)、"平和、正義、無抵抗"(第22条)、"真実と宣誓拒否"(第20条)を参照してください。

第24条 神の統治

私たちは神の統治に希望を置き、天に昇られた私たちの主キリストが栄光のうちに再び来られて生ける者と死にたる者とを裁かれる日に、神の統治が実現することに希望を託します。キリストは、すでに神による未来像に従って神の統治の下に生きている、御自分の教会を集められます。私たちは、神の最終的な勝利、善と悪とが争う今の時代の終焉、死者の復活、新しい天と新しい地の出現を信じます。そこでは、正義と公正と平和のうちに、神の民が、キリストと共に統べ治めます。

被造物である罪深い者はいまだに神の御支配を認めていませんが、私たちは、宇宙を創造なさった神が、知恵と忍耐と正義によってその宇宙を支配し続けておられると信じます。信仰深いイスラエルは喜びの声をあげて神を王に迎え、神の国が完成することを待ち望みました¹⁾。私たちは、その実現の時がイエスの働き、死、よみがえりによってすでに始まっていると断言します²⁾。イエスは神の統治が近いことを宣言なさるとともに、将来におけるその実現、その癒しと裁きについても宣言なさいました。イエスは御自分の生涯と教えとによって、神の統治が、貧しい者、見捨てられている者、迫害されている者、子どものような者、からし種のような信仰を持っている者に及ぶことを示されました³⁾。神は、この御国のためにイエスを王とし、主として任命なさいました⁴⁾。

私たちは、教会が神の統治の未来像に従って今を生きるように召されていると信じます。このように、私たちは、神がいつの日か完全に確立なさる御国を事前に体験することが許されています。教会は霊的、社会的、経済的な現実であり⁵⁾、来たるべき世の正義、公正、愛、平和を、今、実証します。教会は自らの主に従いつつ、この世の国が私たちの主の御国になることを待ち望みながらこれを行います⁶⁾。

私たちは、神がイエスを死者の中からよみがえらせなさったように、私たちをも死者のなかから復活させてくださると信じます⁷⁾。キリストが栄光を帯びて裁くために再び来られるとき、死者は墓から出て来ます。すなわち、"善を行った者

は、復活していのちを受け、悪を行った者は復活して裁きを受けます⁸⁾。"義なる者は復活して神と共に永遠のいのちに至り、不義なる者は復活してゲヘナ(地獄)に至り、かつ神から引き離されます。こうして、神は迫害されている者に正義をもたらし、罪と悪と死そのものとに対する勝利を確証されます。

私たちは新しい天と新しい地、新しいエルサレムが来るのを待ち望みます。そこでは、もはや神の民は飢えることも、渇くことも、泣くこともなく 9 、讃美の歌を歌います。"御座にすわられる方と、小羊とに、讃美と誉れと栄光と力が永遠にありますように。アーメン 10 。"

- 1) 出エジプト15:8、士師記8:23、ゼカリヤ14:9
- 2) マルコ1:15
- 3) マタイ 5:10、8:10-12、17:20、21:31、ルカ 6:20
- 4) 詩篇2:7、マルコ1:11、ピリピ2:9
- 5) 使徒 2:41-47
- 6) 黙示11:15、15:3-4
- 7) I コリント 15:12-58
- 8) ヨハネ5:28-29
- 9) 黙示 21:1-4、7:9-17
- 10) 黙示 5:13-14

解説

- 1)教会は、神の統治の証人として、今神の御支配の下に生きるように召されています。今の私たちの共なる生活は、来たるべき時代における共なる生活に倣ってつくられるものです。これは、神の統治がこの世と関係があり、神の御支配による倫理は将来のある時まで先延ばしにされるべきではないということです。それでも、教会は、神の御国すなわち神の統治とまったく同じではありません。また、教会は、この世の状態を一気にあるいは徐々に改善することによって、今の時代に御国を完全にもたらすことができるという幻想を抱いてもいけません。
- 2) ある人たちにとって、神の最後の審判という考えには問題があります。なぜなら、それは、神の愛とあわれみとを犠牲にして、神の怒りを強調しているように見えるからです。神の愛による忍耐はきわめて大きいので、神は、だれにも契約関係に入ることを強要なさらず、それを拒む者を神から離れたままにさせておかれます。しかも、神の正義は、悔い改めずに悪を行う者が罰せられずにはおら

れないことを意味しています。義のために苦しんでいる者は、弁明と悪からの救いの時として、来たるべき神の統治を待ち望むことができます(詩篇 37、黙示 6:9-11)。来たるべき時代には、権力のある者が引き下ろされ、身分の低い者が高く上げられるという驚くべき逆転が起こります(ルカ 1:52-53、及びルカ 3:5 も参照)。

神の民のためのこの正義は、キリストを信じる者に対する死者の復活と永遠のいのちを伴います(ヨハネ 6:40、11:25-26)。ちょうど神がイエスを死者の中からよみがえらされたように、キリストに属する者も死からいのちへとよみがえらされます(Iコリント 15:15-21)。今、私たちは、死すべきからだでキリストに従います。同時に、私たちは、新しく復活したからだでキリストにあるいのちに与ることを待ち望みます(Iコリント 15:35-57)。

新約聖書は復活について多くのことを述べています。それに比べると、死から 復活の時までの人々の状態ついては語る回数もずっと少なく、はっきりと語って もいません。そうであっても、キリストにある私たちは、死でさえも神の愛から 私たちを引き離すことはできないことを確信しています(ローマ 8:38-39)。

3) 今の時代も来たるべき時代も、神の都には政治的、社会的な面があります。 それは、共同のからだであり、主であるキリストを通して、神によって支配されています。来たるべき時代にあっても、神の都は、からだを離れた霊的な実体ではなく、新しい天に関与するのと同じように新しい地にも関与します。これについては、"政府と社会に対する教会の関係"(第23条)を参照してください。

イエスは、来たるべき時代の期日を定めようとしてはならないと弟子たちに忠告なさいました(マタイ 24:36)。私たちはまた、終わりの時代の人々や場所や出来事と、現在の特定の人々や場所や出来事とをあまりにも狭く関係づけてしまうことにも気をつけるべきです。それよりも、神の民は、常に義に生き、神を讃美し、キリストに従い、御霊に導かれ、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストが来臨されるのを、希望をもって待つべきです。

メノナイトの見地による信仰告白- 要約版 --

私たちは信じ、かつ告白します。

- 1 神は臨在なさり、信仰によって近づくすべての人々を喜んでくださいます。 私たちは、永遠に父・子・聖霊である、唯一の聖にして愛である神を礼拝しま す。神は、見えるものと見えないもののすべてを創造され、イエス・キリスト によって人間に救いと新しいいのちをもたらし、終わりの日まで教会と万物と を支え続けてくださいます。
- 2 イエス・キリストは、肉となられた神の言(ことば)です。イエス・キリストは世の救い主であり、十字架の死によって私たちを罪の支配から解放し、神と和解させてくださいました。イエス・キリストが神の子であることは、死からのよみがえりによって公に宣言されました。イエス・キリストは、教会のかしら、高く上げられた主、ほふられた小羊であり、神とともに統べ治めるため、栄光のうちに再び来られます。
- 3 聖霊は、神の永遠の霊です。聖霊は、イエス・キリストの内に宿り、教会に 力を与え、キリストにある私たちのいのちの源であり、信じる者に贖いの保証 として注がれます。
- 4 聖書は、すべて、救いの教えと義の訓練のために、神によって霊感され、聖霊を通して書かれています。私たちは、聖書を神の言(ことば)として、またキリスト者の信仰と生活のための、完全に依り頼み、信頼できる規準として受け入れます。私たちは、教会において聖霊に導びかれつつ、イエス・キリストと調和させて聖書を解釈します。
- 5 神は、天と地及びその中にあるすべてのものを創造されました。そして神は、 被造物を保全し、新たにされます。すべての被造物は、それ自体の中に創造の 源があるのではなく、創造主に属しています。世界は良いものとして造られま した。それは神が善き方であり、いのちに必要なものをすべて備えていてくだ さるからです。

- 6 神は、ご自身のかたちに人を創造されました。神は、地の塵から人を形づくり、すべての創造の御業の中で、人に特別な尊厳を与えられました。人が造られたのは、神と関係を持ち、互いに平和に生き、他の被造物を思いやるためでした。
- 7 アダムとエバに始まり、人間は、神に背き、サタンに屈し、罪を犯す道を選び取りました。すべての人は、創造主の御心にほど遠く、造られたときの神のかたちを損ない、世界の秩序を壊し、他者への愛を限られたものにしました。 罪のゆえに、人間は、悪と死に隷属させる諸力に身を委ねました。
- 8 神は、イエス・キリストを通して、罪からの救いと新しい生き方を与えてくださいます。私たちは、悔い改めてイエス・キリストを救い主、また主として受け入れるとき、神の救いに与ります。私たちは、キリストにあって神と和解し、互いに和解する共同体に入れられます。私たちは、神に信頼を置きます。それは、私たちが、キリストを死者の中からよみがえらせた、その同じ力によって罪から救われて、キリストに従い、完全な救いを知るようになるためです。
- 9 教会は、イエス・キリストを信じる信仰を通して、神が与えてくださる救いを 受け入れた者の集まりです。それは、神の統治を宣言し、教会の持つ輝かしい 希望を事前に体験するため、この世に遣わされた弟子たちから成る新しい共同 体です。教会は、聖霊によって確立され、維持される新しい社会です。
- 10 教会の使命は、神の国を宣言し、そのしるしとなることです。キリストは、すべての国の人々を弟子とし、洗礼を授け、命じておいたすべてのことを守るように教えることを教会に委ねられました。
- 11 水による信じる者への洗礼 (バプテスマ) は、罪からの清めのしるしです。 洗礼 (バプテスマ) はまた、聖霊の力によってイエス・キリストの道を歩むとい う神との契約を、教会の兄弟姉妹の前でなす公約でもあります。信じる者は、 聖霊と水と血によってキリストとそのからだの中に浸されます。
- 12 主の晩餐は、イエスがその死によって聖定された新しい契約を、教会が感謝して思い起こすしるしです。共に与るこの食事において、教会は、イエス・キリストが来られるまで、神との契約および互いに交わした契約を新たにし、

そのいのちと死に与ります。

- 13 弟子の足を洗うことで示されたように、イエスは、愛をもって互いに仕え合うように私たちを召しておられます。それゆえに、私たちは繰り返して何度も清められる必要があることを認め、自尊心や世俗の権力を進んで捨て去る思いを新たにし、謙虚な奉仕と犠牲的な愛によって自分のいのちをささげます。
- 14 教会は、一新してくださる神の恵みのしるしとして戒規を行います。 戒規 は、過ちを犯した兄弟姉妹を罪から解放させ、神との正しい関係と教会におけ る交わりとを回復させようとするものです。 戒規を行うことにより、この世に おける教会の証しを高潔なものにします。
- 15 奉仕の務めは、キリストの御業の継続です。キリストは、聖霊によって信じる者すべてに賜物を与え、教会およびこの世において奉仕ができる力を授けてくださいます。神は、教会において特定の者たちを召して、牧会の務めやさまざまな職務につかせます。奉仕の務めをする者はすべて、神と信仰共同体に対して責任があります。
- 16 イエス・キリストの教会は、多くの器官から成る一つのからだであり、一つ の御霊によって、信じる者が霊的に共に建て上げられて神の住いとなるように 整えられます。
- 17 イエス・キリストは、私たちを弟子の道へと召し、自分の十字架を負って 従うようにと招いておられます。神がくださる救いの恵みの賜物によって、私 たちは、イエスの弟子となる力を与えられ、イエスの御霊に満たされて、イエ スの教えと御跡に従いながら、苦難を通して新しいいのちに至ります。イエス の生き方に忠実であるとき、私たちはキリストと一致するようにされ、この世 の悪から切り離されるようになります。
- 18 イエスの弟子であることは、御霊にあるいのちを知ることです。イエス・キリストの生と死とよみがえりが私たちの中で形づくられるにつれて、私たちはキリストのかたちに成長し、神との関係も深まります。聖霊は、個人による礼拝にも共同体による礼拝にも働き、私たちをさらに深い神との交わりに導き入れてくださいます。

- 19 神は、人の生活を家族によって始め、家族を通して祝福しようとされています。さらに神は、すべての人が教会の一員になること、すなわち神の家族になることを望んでおられます。独身者も既婚者も教会の家族として養い養われ、癒し癒されるとき、家族全体が神の御心である完全な一体に向かって成長することができます。結婚生活において、私たちは貞節と誠実を求められています。
- 20 私たちは、真実を語り、ただ「はい」または「いいえ」とだけ答え、宣誓を避けることを決意します。
- 2.1 すべてのものは、神に属しています。神は、私たちに委ねたすべてのもの を、教会が忠実に管理して生き、今、神の約束された安息と正義に与るように 召しておられます。
- 22 平和は、神の御心です。神は、世界を平和なものに創造されました。 神の 平和は、イエス・キリストにおいて、あますところなく完全に現わされています。 キリストは、私たちの平和であり、全世界の平和です。 私たちは、聖霊に導かれ、キリストに従って平和の道をたどり、正義をなし、和解をもたらし、たと え暴力や戦争に直面しても無抵抗を実践します。
- 23 教会は、神の聖なる国民であり、そのかしらであるキリストに全き忠誠を尽くし、あらゆる国家、政府、社会に対して、神の救いの愛を証しするように召されています。
- 2.4 私たちは、神の統治に望みを置き、キリストが栄光のうちに再び来られて、 生ける者と死にたる者とを裁かれる日に、神の統治が実現することに希望を託 します。キリストは、すでに神の統治の下に生きているご自身の教会を集めま す。私たちは、神の最終的な勝利と争いの絶えない今のこの時代の終焉、死者 の復活、新しい天と新しい地を待ち望みます。そこでは、神の民が、正義と公 正と平和のうちに、キリストと共に永遠に統べ治めます。
- 注) ①番号は、本文の各箇条に対応しています。
 - ②太字は、その項の主題を示しています。

日本メノナイトキリスト教会 信仰告白 一本文と解説―

発効日 2013年8月

編集 桃野泰子

発行 日本メノナイトキリスト教会協議会

印刷 あいわプリント (旭川市3条4丁目)

TEL 0166-26-2388

頒価 300円